577-43
1200501520326
577
43
O
複写

10u 29

長崎志

正編

昭和三年

577-43

前がき

葡萄牙人の吾邦に渡來してより後、皇政維新の際までの時代に於ける日本と海外との交渉は、ひとり國史のみに止まらず、なほ東西兩洋の歴史に於てもまた、眞のそして正確なる意味に於て、重要なる部分をなすべきものたる事を感悟すべきものであります。

果して然らば、永祿より寛永に至るまで、葡萄牙人の根據地にして、且つ鎖國時代に於て吾邦唯一の唐紅毛船入津の大湊たりし長崎の歴史はまさに、邦人のみならず、なほ外人も亦重視すべきものであると思ひます。

近來吾邦の對外關係の攷究いよ〳〵進むにつれ、長崎の歴史に注意を與ふる者がますます多くなつて來ました。隨つて自然

長崎の古文書、舊記、其他の史料に對する需要のいよ〳〵廣く且つ切なるものあるは、まさに當然の成り行きと謂ふべきものでありませう。

然るに長崎史の研究資料たる古文書及び舊記などは、概ね剞劂に附せられざりしため、自然世に流布せるものは極めて稀れであります。

更生社諸賢は、かねてこの研究上の不便を遺憾としてをられましたが、此度博英社主人藤木喜平氏と協議の結果、いよ〳〵舊記や古文書の印刷に着手する機會を得、私に監修や校訂方を切に勸められましたので、私は熟考の上之を甘諾し、先づ諸舊記の中より、往時長崎の正史として認められた長崎志正編、卽ち舊名長崎實錄大成と長崎志續編とを選拔して、之を推薦しました。そして手初めに長崎志正編が上梓さるゝ事になりました。

私はかねて本書の編輯者たる田邊八右衛門茂啓の自筆本を獲たいと思ひまして、諸方面に之を搜し索めましたが、殘念ながら今日まで之を發見することを得ませんので、長崎縣立圖書館本、長崎市役所本及び諸舊家の藏本等を借覽してみました。併し一向最善本と認むべきものが見當りませんので、結局手許に在る聖堂書記役村岡東吉郎重明の增訂本を底本として採用した次第であります。

この寫本に挿入せる繪圖は、一つも省略せず、悉く之を揭載しておきました。尙ほ參考のため原本に揭載せざる繪圖及び寫眞を少々附加へておきました。

それから附錄として「附考」と「阿蘭陀甲比丹名寄」とを終卷の後に揭載して、聊か參考に供する事に致しました。

本書上梓の事に就ては、博英社主人藤木喜平氏が一方ならず援助されました。また本書の編修の事に關しては渡邊庫輔氏がいろ〳〵盡力されました。兩氏に厚く御禮申上げます。

昭和二年十一月十一日

校訂者　古賀十二郎　識す

解題

本書は長崎聖堂書記役たりし田邊八右衛門茂啓の撰に係るものにて、當初田邊氏は之を長崎實錄大成と名づけたが、のち長崎志正編と稱せられ、長崎志續編と接續することになつた。

田邊氏が自著として長崎實錄大成を脫稿して、之を長崎奉行所に献じたのは、明和元甲申年九月の事であつた。その際官命によりて書繼ぎする事になり、明和四丁亥年まで稿を續けたので、明和元年九月以前は田邊氏の自著として取扱ひ、その後は寧ろ長崎奉行所の編纂として取扱ふべきものである。また長崎奉行所に於て長崎實錄大成全部を採用したのであるから、長崎奉行所の編修として取扱ふべきものと思ふ。

それは明和五戊子年春田邊氏の逝去後、同年十二月長崎奉行石谷備後守が書物改手傳役たる小原勘八克紹に本書の書繼ぎを命じ、小原氏は翌明和六己丑年より本書の體を承けて、本書の後に嗣錄することになり、また其翌明和七庚寅年に至り、之を長崎志の正編と名づけ、別に嗣錄すべきものを長崎志續編と稱した

事實によりて明白である。それで長崎志正編及び長崎志續編は併せて長崎奉行所の編修と見做しても差支へはなからうと思ふ。

田邊氏は本書掲載に係る寶曆十庚辰年仲秋の自序に於て、その編修の顚末を述べ、「三十年來の本懷を遂る事を得たり」と記してゐる。由之推之、田邊氏は享保十五庚戌年前後の頃より本書の編修に着手したものと謂ひたい。それは彼が四十餘歲のころの事であつた。爾後田邊氏は、三十年の間公務の餘暇博く古記錄を求め、徧く衆說を考覈し、旁ら耆老の傳說、村夫野叟の雜談と雖も、據證すべきは、承けて之を收め、勞思多端、その稿を更ふること數次、其年を閱すること廿有餘年、寶曆四甲戌年の秋に至りて、時の長崎奉行菅沼下野守に、その稿本を上りしが、奉行菅沼氏は、その篤志を賞美し、この纂輯を義舉と稱揚した。そして田邊氏が、霜辛雪苦、多年なほ未だ全備するを得ず、官威を藉るに非れば、到底調査を進め難きことあるを歎くを聞き、その功の未だ全く畢らざるを惜み、廼ち有司に命じて、官庫の圖籍はもとより、なほ社寺等所藏に係る記錄、さては私人の珍藏秘記等に至るまで、遍く之を披閲せしめ、田邊氏の研究に多大なる便宜を與へたので、田邊氏はさらに見聞を廣くし、同異を網羅し、遂に本書を成就するを得るに至つたのである。

越て明和元甲申年九月田邊氏は本書全部拾六冊を長崎奉行所に納めた。然るに官命によりて更に稿を續くることになつたので、夙夜懈らず、以て明和四丁亥年に至りしが、翌明和五戊子年の新春に入りて病に臥し、正月三十日を以て、東上町の自宅に於て易簀した。得年八十有一。法名を憩靈院功山茂啓日榮居士と云ふ。その筆を起してより之を擱くまでの期間は實に四十年餘りの久しきに亙つた。

本書は十六卷より成り、第一卷より第十二卷迄は政治、宗教、異國人との交渉、異國物產、異國渡海、漂流等に關するのである。それに唐紅毛に關する年表が附加へてある。それから第十三卷より第十六卷までは年表擧要の部分をなしてゐるが、それには勿論唐紅毛に關する年表に記載せる事項を省略してゐる。

卷頭には馬白巔、樊元衰兩人の序文と自序とが載せてある。馬白巔と云ふのは其頃碩學として世に知られた中山太郎八其人に外ならぬのである。中山氏は歸化唐人馬榮宇の裔孫であつたので、唐風に馬姓を用ひたのであつた。白巔は其佳號である。別に玉壺と稱す。來舶唐人伊孚九、沈草亭、唐僧道本その他面見諸子などの作を集めて摘蔬集一卷を編輯したこともあつた。寶曆十一辛巳年正月十一日を以て捐館す。

樊元衮は唐譯司高尾嘉左衞門を云ふ。高尾氏は歸化唐人樊玉環の裔孫である
から、斯く唐風に樊姓を用ひたのである。元衮は名で、公補また耕甫は佳號である。
字を熙齋と云ふ。安永四乙未年七月廿九日を以て玉樓の客となつた。

本書には參考史料目錄の記載が無いので、如何なるものを用ひたのか、それは
しかと判明しない。併し主として根本史料と認むべきものを利用することに苦
心した事は、田邊氏の序文に據りて、容易に窺知ることができる。

それから、本書の內容を吟味してみると、時代の古くなるにつれ、舊記利用の範
圍がそれだけ廣くなり、疑はしき點あるため往々田邊氏の自說が提供されてゐ
る。隨つて田邊氏の說が往々肯綮に中つてゐないこともあるのは、已むを得ざる
わけである。之に反して時代が新しくなるにつれ古文書利用の範圍がそれだけ
大きくなつてゐる。

但だ田邊氏の利用せる史料は、長崎以外他藩はもとより德川幕府の古文書に
して長崎に關係あるものを含有してゐないのは、已むを得ないことである。併し
彼は唐人にも質問した事であらうと思ふ。また阿蘭陀人に、通詞を介して質問し
たことは、本書に田邊氏の自記があるから明白である。

本書の記載整理は、從前の諸舊記のそれよりも著しく進步してゐる。本書は類
を以て部門を分ち、箇々の事項に至りては、必しも、詳密なるを尙ばず、概要を擧げ
て、前後彼此の調和を失せざらん事に努めてゐる。それで內容は割合によく整ふ
てゐる。もとより本書の採りたる分類の方法には一得一損あり、一長一短もある
が、確に自餘の舊記よりも遙に優れてゐると思ふのである。

繪圖も割合に多く用ひられてゐる。これも亦自餘の舊記には概ね缺けてゐる
のである。もとより諸役所其他の圖や唐紅毛船の繪は研究資料としてはもの足
りない感が無いでもない。併しなかには有益なるものもある。たゞ大率に之を謂
へば、密なものでなく、單に概要を示す事に止めたものと思ふ。なほ文字の連ねに
のみ重きをおき、繪圖が記載を補ひ助くること顯著なるものある事には十分に
氣付かなかつたかも知れぬ。

此度本書の出版にあたり、底本として採用したのは、聖堂書記役村岡東吉郎重
明の增訂本に外ならぬのである。村岡重明は阿蘭陀譯司本木庄左衞門正榮の甥
であつたのを、本木氏が養子となしたもので、初め通稱を文吉と云ひ、諱を延久と
云ふ。聖堂書記役村岡伊兵衞重文の嗣となり、聖堂書記役となつた。嘉永五壬子年

閏二月初四日逝く。享年六十歳。法名を清德院重明子羊居士と云ふ。

養父重文は、小原勘八克紹の歿後、野間壽恒と共に長崎志續編の嗣錄に從事し重明も亦同じく右の編輯に關與した人である。

凡　例

(一)本書原本の各卷の前には目錄が掲げてあるが、それを便宜上總目錄の次に掲ぐることにした。それから第五卷寺院開創の部上の前に「黃檗山唐僧歷任之畧記」の記事が載せてあるのを、本文の始におく事に變更しておいた。

(二)本書中村岡東吉郎重明の增訂に係る分は「貼紙」「附箋」と記し、或は「　」の印を以て、之を本文と區分する事にした。

(三)本文には便宜上、●○點を附け、なほ行を改めておいた處もある。

(四)本文には片假名が用ひてある。それで片假名にて記せる外國語をそれに接續せる本文の片假名と區別するために往々、點をその右側に附けておいた。

(五)本書原本挿入に係る繪圖は、概ね密ならず、又畫人に非る者の筆なりと見え巧妙に描寫せられたるもの絕えて無し。就中甚粗なるものは、之を小形の玻璃版にて現すことにした。

(六)原本には頭註を用ひず。便宜のため之を附けて本文の內容の概要を摘記することにした。尙ほ本文の上部に解釋及び訂正文を載せておいた。併し長文にして上部に餘白十分ならざる場合には、之を本文の次に記載しておいた。その場合には總て六號活字を用ひて、本文と區別しておいた。

(七)本書の附錄として掲載せる「附考」は本文の註解または訂正の積りにて記せるものに外ならぬのである。本書の頭註は短文に非ざれは餘白に掲載し難きを以て特に本編を草しておいたのである。

(八)尙ほ附錄として「阿蘭陀甲比丹名寄」と題するものを掲載しておいた。外題は「阿蘭陀甲比丹名寄」と稱すれ共平戸及び長崎の阿蘭陀商館長以外に、臺灣總督、蘭領東印度總督、平戸英商館長及び館員等の姓名をも記しておいた。たゞ便宜のため最初の「阿蘭陀甲比丹名寄」と云ふ外題を採用したのに外ならぬのである。甲比丹の姓名は、すべて片假名にて表すことにした。そして姓名の發音は、往時譯司其他邦人の記錄に載せたるものに依據した。併し洋

名中邦人の記錄に片假名にて記せるものを見當らなかつた場合には、編者の發音を片假名にてしめし、特に上部に印を附加ふることにした。

(九)附錄中にも亦、多少繪圖を用ひておきた。

長崎實錄序

田子功山修長崎實錄蓋三十餘載矣今秋始告成共十六卷上從國家柔遠之仁番漢鄉化之信下及細民之居止流離內外盡擧洪纖亡遺一百八十餘年事跡一覽瞭然可謂一不朽盛業也田子嘗謂以崎多事豈可少紀乘乎公暇恒讀數家所錄長崎雜記見聞記年譜等書曰稽考不精蒐羅不廣繁簡雜俚互有脫漏未免多疏略抵捂曷稱全記乎於是時日益修輯不已沙汰舊記取舍衆說去疑刪怪務欲其實核詳彰或至舊記不載而隱僻難著明者則愈加弘搜遍索之力待之以歲月雖芻蕘媮嫗之談苟有一言半語可以爲據證者亦承而收之間亦竊附己意爲之斟酌故錄中所記事或有一朝而即了者或數月而悉之者或數年而稍明者或十數年而未全該者其間難易疾徐逈不同也如斯既以三十年之久僅得十分之八若其二分則俱各方

之所祕重不能問而致者也嗟呼昔孔子之作春秋也據魯君之勢賴木賜之資聘七十二國求舊史然後事無遺文矣夫以聖人筆削舊史尚且若是其難也而況山也已無據賴何由得人々祕而記之爲之長歎息者亦數載矣時乎時乎幸屬今茲鎭君菅公來監於崎專以博雅明察爲治甚喜山之篤志亦惜其功未畢特令開府庫給圖籍亦命諸社佛寺並各衙執員等俱出祕記助參考而終其稿於是乎商彝周鼎無不具載晉儉衛浮燦如指掌則始大成以備一方之美觀原本進之王府副本藏家豈不此記之浩幸哉謄寫已竣乞余言弁於其首余雖不敏不敢固辭曰吁有是哉行々不已必盡嵩衡之高搖々不止必究淮泗之大子之勗力不休果期於成也與管子有言思之思之不通神將通之子之繹問不置其獲祐於神也與而今後崎人觀之而知時之隆替知事之張弛知祖先之劬勞知君上之綏撫則必能破觚劉雕追還朴乎昔時夫如此奚啻是記之幸

實崎人之幸也後之宰邑者觀此而繼絶擧廢復舊善革後弊施時宣之恩布撫遠之澤則必能仁聲懿聞遠及漢番夫如此奚啻崎人之幸乃吾土之光輝也方今

聖君在上崇右文之化至治百禩都鄙又安他日修國史者有采干崎則是記不無小補夫如此奚啻一鄉之私記是天下之公記也其謂不朽盛業不亦宜乎謹序

寶曆四年甲戌仲秋

長崎後學馬白顚中山氏譔

長崎實錄大成敍

實錄者何長崎之方策也大成之者功山田子嘗從事於此蓋三十年一日也元龜而降邈焉尚矣其詳靡得而稽迨今田子之書成甫知我崎之所自夫崎西海之一彈丸地而雖匪神州之略赤縣之畿其所從來鳥奕乎百世歷歷可甄者唯載籍之傳舍此奚據亡論稗史野乘爲之者勞觀之者逸丈夫之苟生於此而通邑大都以至遐陬僻壤目之所未覩耳之所未聞自非傳紀之足徵焉能知夫生於此而有此土哉是故彰往訓來發皇耳目必有良史之才而使然邪若夫功山田子者嘗擢者英之選書記翩々職是之由眈學好古夙負奇資一鄉之人目以今之行祕書也田子生干崎而知于鄉孰若吾輩之生于後而甫知我崎之所自者田子先而達者也田子傷我崎之闕典擬工倕於曠歲締搆是務考自元龜而降採摭諸家所藏事蹟遂成一家言靡而不典

典而無實者或背諸家之記聞而信于流俗之口囂與夫窓而無聞穀而不傳乃至駁襍而不雅馴者餙覈其實漁獵其要不雷同相從不隨聲是非一百八十餘年事蹟網羅殆盡可謂勤矣田子而緪以此擧何啻爲山九仞而功虧一簣而已哉迺以是歲薈而成編埤之附錄共爲十六卷名曰長崎實錄大成其書以國字造焉欲令人々讀之易曉每卷左白以待來者之登籙庶幾同好者有補益則千載之日至可坐而致也田子之意將以此而藏諸名山邪將以積伐而美夸曜於當世邪然而至於顧盻增其聲價駸駸乎輸能於明時者可計日而待也方今世不乏文治使渠誉諸崎之所以自而錯綜其事則雖曰稗史野乘乎亮采製錦之一端亦未可知田子惟家藏其書非待賈也且不謀鍥梓非祕也曰有以夫謂之一家言可也謂之方策可也頃者田子徵余言以弁其首余焉能玄晏此帙哉乃撫卷而嘆曰吁以其所詘於人而信於知己者爲道存耳余何吝一言乎田子哉世之耳食者不以人廢言則庶乎不孤是集之大有成也於是乎書

寶曆歲次庚辰孟夏

長崎後學樊元袞公補氏撰

自叙

長崎一邑西激瀕海之僻地也曩昔惟有數家樵漁而自營生業耳何得有官民集聚驛傳逢迎往復于郡國也乎元龜中西洋商舶始進本港求通互市而其徒内持陰謀欲托事于貿易而張邪教寓居街市之際誘人以報應之説或與珍奇寶貨惑亂愚民於是無知之徒靡然信從彼教遂至頽廢本邑正祠而敬立蠻祀漸經年月兇惡已益熾矣天正中關白秀吉公聞知是事甚怒其非義則遣回其酋長而禁其教即陞崎爲直隷建鎭府監守獨爲市賈而來者固許之矣雖然彼徒巧計百出而愚民亦浸染信奉者往々不絶數年之後延蔓南海山陽兩道及畿内之間益張邪教於是大發人徒收捕數百人皆悉流斬乃至慶長甲寅悉拆碎彼之所建祠宇而燬盡焉雖則嚴禁邪教尚有隱匿在崎唱教者不斷至寛永十五年乃有誅戮島原兇徒之事當是時飭令

禁絶盡收蠻人留崎者逐回無遺類不得再來仝十八年又恐嗣後再生災殃下令肥筑兩藩王侯搆城營修砲臺列巨艦火器等以備不虞之警矣又令唐船及和蘭船限于本港爲貿易不得到他處於是各地商賈輻湊本港事務日廣人衆日繁百事咸興則始爲通市豊麗之塲也既然如此豈可無記乘哉本邑開基于元龜迄于今已經一百八十餘年其間雖有數家所記簡略而不備缺乏而不精或重出人之所聞知而不窮盡人之所未知何稱全記乎余公事之暇博求遍問考合衆說旁及耆老傳語雖村夫野叟之談可以爲據證者承而收之删繁補略務要實覈詳明勞思多端更其稿也數次閲其年也數歲尚未得全備蓋十分而缺二其間有余力之不能致者每念非藉官威斷不能明也爲之奈何久以爲慊然矣先是寶曆甲戌秋菅沼公在鎭適將原稿而上之何圖辱蒙奬揚則曰一郡一縣不得無記乘而况崎者華蠻之通津係國家之大體豈可無載記乎至今尚無全錄固闕文哉今汝所錄輯可謂義舉矣甚稱其篤志惜夫其功之未全畢特准披閲官庫圖籍亦命諸祠寺院及各署之執員等俱出若干祕記以助參考於是乎究合衆記以質舊說之註誤今已大集成以得遂愚之三十年來之蓄志幸莫大焉至其奇說怪談涉不經者悉舍而不取務選其攷證可憑之正說分部十二卷又編一百八十餘歲之年表擧其年所有事目而云其詳註明某卷內則使觀者得其緣縁共爲四卷通計十六卷題曰長崎實錄大成總不揣其文卑陋唯要事實詳明而已嗣後同志之士如或有續編逐年之事務者則此書之不泯而余所志暨諸永年之爾

維時

寶曆十年歲次上章執徐仲秋望前二日

本邑晚生田邊茂啓謹撰

長崎一邑は西海邊僻の地にして昔年數家の推漁等自から生業(ナリワイ)を營む而(ノミ)已にて諸民來集り驛路より郡國に往來する等之事無之元龜元年西洋の商船初て當湊に令着岸交易を通せん事を願ひ求む然るニ彼徒内心に陰謀を巧ミ商賣に事寄せ切支丹の邪教を勸ん事を欲し市中ニ在留之間人を誘ふに因果報應の說を以てし或ハ珍奇の寶物を與へて愚民を惑亂せしむ爰ニおゐて無知の輩彼教ニ從ひ靡き遂ニ此地の神社佛寺を破却し蠻國の祀堂を造立し年月を經るに隨ひ惡行益熾なり天正十五年關白秀吉公此事を聞し召れ甚以其非義なる事を怒り給ひ則其頭人を本國に被追返切支丹の邪教を禁止せられ長崎を公料に被召上奉行所を建て令監守らる但爲商賣往來する者ハ免し置る雖然彼徒種々の巧計を盡す故愚民等其惡執に染着信伏する者一圓絶せす數年の後南海山陽兩道及ひ五畿内迄ニ延蔓り益邪宗

門を弘めし故大勢の捕手を出され數百人を搜捕へて悉く御仕置に行はる慶長十九年に至り彼徒か建る所之祀堂を悉く打碎きて燒捨ニせられ愈邪教を被嚴禁といへとも猶又長崎に隱れ居て教を唱ふる者斷絶せす寛永十五年に至り島原一揆の邪黨誅戮の事あり此時ニおゐて嚴しく被禁絶長崎在留の蠻人とも不殘被追返已後決而不令渡海樣ニ被仰付同十八年ニ至り以後再度災を生せん事難計之旨爲　上意黑田鍋島兩家に被仰付湊内ニ城營を構へ砲臺を築き軍船火器等を列(ツラ)ね置き不意の警(イマシメ)に備らる又唐船阿蘭陀船長崎湊に限り交易を遂しめ他所に至る事を免(ユルサ)れす依之諸國の商人此地に來集り事務日々ニ廣く人衆日々ニ繁く萬事隆興して則通市豐麗の場所と成れり既に如此なる時ハ豈記錄無るべけんや當邑元龜元年を開基とし今年ニ至て百八拾餘年ニ及其間數通の記有之といへ共簡略にして備

らす缺乏ニして精からす或ハ人の聞知たる事を重出し人之不知事を窮盡事なし何そ全記と稱せんや余公務の暇博ク求め徧ク問諸說を考合せ古老の傳語村夫野人の談話といへ共其證跡ある事ハ是を留置繁きを删略せるを補ひ務て正實明細なる事を要し勞思多端にして草稿を改替る事も數度に及ひ年月を經る事も數歲にして猶いまた全備する事を得す但十分にして二を缺其間余の力の難及事あり毎に念ふニ公儀の御威光を藉るに非んバ明白する事有之まし如何して此事を遂んやと年來心苦を疚り于茲去ル寶曆四年秋　菅沼公御奉行たりし時右之草稿を一覽に備る處辱ク御賞美を蒙る其詞ニ曰凡ソ一郡一縣に記錄なき事有へからす況や長崎は唐國外國渡りの津にして國家の大事に係る事あり豈載記無るべけんや今に至る迄全錄無之ハ誠ニ闕文なり今其方此記を編輯有しハ是義舉なりと謂へしとて甚其篤志を稱せられ其功の全ク畢さる事本意なしとて御役所御文庫の圖籍を披閲する事を許され又諸社寺院其外諸役所執員等ニ命せられ俱に數通の祕記を出して參考を助けしめらる爰ニおゐて諸記を究合せ舊記の誤を質明し此時大に集成して愚か三十年來の本懷を遂る事を得たり幸是より大なるハなし其奇怪の話說信用成り難き者ハ悉ク捨て取らす其證跡ある實事を撰ひ部を分ッ事十二卷又百八十餘年の年表を編し其年中に有し事の名目を擧其詳なるは何卷の內に有之由を記し其事を繰出し易からしむる者四卷都合十六卷長崎實錄大成と稱す其文の卑きを揣らす其實の詳明なるを要とする而已此已後同志の士若遂年の事務を續編する者あらハ此書も泯すして余か志も永年に及ハんと云爾

維時

寶曆十年歲次庚辰仲秋

本邑晚生田邊茂啓謹撰

二八

長崎實錄大成

總目錄

第一卷　長崎建始御料所被仰付之部　一頁
第二卷　御役所諸御番所等造營之部　三五頁
第三卷　御料地高並御高札役屋敷等之部　七三頁
第四卷　神社經營之部　修驗道之部　一一七頁
第五卷　寺院開創之部　上　一六一頁
第六卷　寺院開創之部　下　二〇五頁
第七卷　南蠻船渡海同御制禁之部　二四五頁
第八卷　阿蘭陀方來歷之部　二八七頁
第九卷　阿蘭陀船入津並雜事之部　三〇九頁
第十卷　唐船方來歷之部　三四三頁
第十一卷　唐船入津並雜事之部　三七三頁
第十二卷　從日本異國渡海之部　四二五頁

異國船並異國人來着之部
從唐國日本人送來之部

年表擧要

第十三卷　元龜元庚午年起元和九癸亥年止　合五十四年　四六三頁
第十四卷　寛永元甲子年起天和三癸亥年止　合六十年　四八三頁
第十五卷　貞享元甲子年起寛保三癸亥年止　合六十年　五二七頁
第十六卷　延享元甲子年起　五八一頁

第一卷目錄

長崎建始御料所被仰付之部

一長崎開基之事　一〇一頁
一秀吉公禁邪宗門長崎御料所被仰付事　一〇六頁
一長崎御奉行始並異國往來御免之事　一〇八頁
一村山東安御代官相願之事　一〇九頁
一末次平藏御代官跡役蒙仰事　一一〇頁
一唐船長崎一方令着津並日本ヨリ異國渡海御停止之事　一一一頁
一阿蘭陀船平戸ヨリ長崎被移事　一一四頁
一歷代御奉行之事　一一四頁
一上使並御目付之事　二四頁

第二卷目錄

御役所諸御番所等造營之部

一御奉行御屋敷之事　三五頁
一岩原御目付屋敷之事　三八頁
一西泊戸町御番所造營之事附深堀在番之事　三九頁
一道生田鹽硝藏之事　四二頁
一石火矢臺修築之事　四四頁
一湊內御用船之事　四六頁
一近國諸家聞役之事　四七頁
一野母並烽火山御番所之事　四八頁
一小瀨戸御番所之事　五二頁
一御船藏之事附鹽硝藏之事　五四頁
一御役所附武具之事　五七頁
一藥師寺家御預ヶ石火矢之事　五九頁
一御關所武具並市中鐵砲御取上之事　六一頁
一瀨崎御用米藏之事並新地御米藏所事　六二頁
一大波戸之事　六五頁
一新地土藏之事　六八頁
一梅ヶ崎築地之事　六九頁

第三卷目錄

御料地高並御高札役屋敷等之部

一御料地高之事　七三頁
一惣町地割之事　七五頁
一御高札並囑託銀之事　七九頁
一長崎會所之事附武具藏之事　九七頁
一時之鐘鑄造之事　一〇〇頁
一遠見番役屋敷之事　一〇一頁
一唐人番役屋敷之事　一〇二頁
一船番役屋敷之事　一〇二頁
一町使役屋敷之事　一〇四頁
一散使役屋敷之事　一〇五頁
一囚獄屋敷之事　一〇五頁
一長崎堅横並諸處道法之事　一〇六頁
一近國道法並當表藏屋敷附異船來津之節諸家軍所之事　一〇九頁
一湊浚（サラヘ）並石錢（コクセン）取立之事　一一四頁

第四卷目錄

神社經營之部

一正一位諏方三所大明神社　一一七頁
末社惠美酒社　八劔ノ社
一天滿宮松森社　一三二頁
末社梅園社
一伊勢大神宮御祈禱所　一三七頁
一八幡大神宮社　一三九頁
一水神社　一四一頁
一神崎船魂社　一四二頁
附聖堂　一四三頁

修驗道之部

一大生山寶正院　一四八頁
一如意山本覺寺　一四九頁
一無凡山神宮寺　一五〇頁
一寶正山金剛院　一五二頁

一大福山聖壽院　一五三頁
一前熊山南光寺　一五四頁
一廣德山大行寺　一五五頁
一能滿堂大敎院　一五六頁
泉良院　金藏院　大學院　快行院
社僧寶泉坊

第五卷目錄

寺院開創之部上

諸寺院創建有シ年代ノ順次ヲ以テ記之。但宗旨ノ部ヲ分テ記スル時ハ當邑ニテ建始ノ年代遲速混雜スル故如此

卷首　黃檗山唐僧歷任之畧記　一六一頁
淨土宗　悟眞寺　慶長三戊戌年建　一六六頁
一向宗　正覺寺　同九甲辰年建　一六八頁
同　宗　大光寺　同十九甲寅年建　一六九頁
同　宗　光永寺　同年建　一七一頁
禪　宗　晧臺寺　元和元乙卯年建　一七二頁
一向宗　深崇寺　同年建　一七八頁
眞言宗　延命寺　同二丙辰年建　一七九頁
淨土宗　大音寺　同三丁巳年建　一八〇頁
法華宗　本蓮寺　同六庚申年建　一八五頁
禪　宗　興福寺　同年建　一八六頁
淨土宗　法泉寺　同七辛酉年建　一九四頁
眞言宗　清水寺　同九癸亥年建　一九五頁
淨土宗　三寶寺　同年建　一九七頁
同　宗　淨安寺　寛永元甲子年建　一九八頁
天臺宗　現應寺　同三丙寅年建　一九九頁
淨土宗　聖德寺　同年建　二〇一頁
一向宗　觀善寺　同年建　二〇三頁
眞言宗　躰性寺　同年建　二〇四頁

第六卷目錄

寺院開創之部下

禪宗　福濟寺　寛永五戊辰年建　二〇五頁
同宗　崇福寺　同六己巳年建　二〇九頁
同宗　春德寺　同七庚午年建　二一三頁
法華宗　長照寺　同八辛未年建　二一五頁
淨土宗　龍淵寺　同年建　二一七頁
一向宗　西勝寺　同九壬申年建　二一八頁
眞言宗　萬福寺　同十一甲戌年建　二一九頁
一向宗　光源寺　同十四丁丑年建　二二〇頁
眞言宗　眞福寺　寛永十八辛巳年建　二二一頁
同宗　願成寺　同二十癸未年建　二二二頁
同宗　聖無動寺　正保元甲申年建　二二三頁
禪宗　禪林寺　同年建　二二四頁
同宗　德苑寺　同年建　二二五頁
眞言宗　青光寺　同二乙酉年建　二二六頁
天臺宗　安禪寺　同年建　二二七頁
禪宗　永昌寺　同三丙戌年建　二三〇頁
同宗　高林寺　同年建　二三一頁

同宗　光雲寺　同年建　二三二頁
眞言宗　能仁寺　同四丁亥年建　二三三頁
同宗　圓福寺　慶安元戊子年建　二三四頁
禪宗　雲龍寺　承應二癸巳年建　二三五頁
同宗　聖福寺　延寶五丁巳年建　二三六頁
同宗　妙相寺　同七己未年建　二三九頁
眞言宗　大德寺　元祿十六癸未年建　二四〇頁
禪宗　大覺寺　寶永元甲申年建　二四一頁
同宗　太平寺　寛延三庚午年建　二四二頁

第七卷目錄

南蠻船渡海同御制禁之部

一隅州種子島（タネガシマ）南蠻船來着之事　二四五頁
一九州諸處南蠻船渡來事　二四六頁
一長崎湊ニ南蠻船着岸恣ニ横行之事　二四六頁
一信長公京都ニ南蠻寺破令造立事　二四九頁
一秀吉公南蠻寺破却之事　二五一頁
一邪教之主意訴人出ル事　二五二頁
一切支丹寺燒捨之事　二五五頁
一阿蘭陀人忠節之事　二五六頁
一伴天連共流罪之事　二五七頁
一地下人正道歸誠神社尊敬之事　二五七頁
一南蠻人出島ニ令在住事　二五八頁
一蠻人之種子阿媽港（アマカウ）港ニ被相渡事　二五九頁
一薩摩ヨリ南蠻船送來事　二五九頁
一邪宗門之者被召捕事　二六〇頁
一島原一揆征伐之畧記　二六一頁
一南蠻船渡海一切御制禁之事　二六五頁
一南蠻船入津直ニ被追返事　二六六頁
一南蠻船燒捨之事　二六六頁
一薩摩ヨリ邪宗門之者送來事　二六七頁
一筑前ヨリ邪宗門之者送來事　二六七頁
一林友宜邪宗門之者訴人之事　二六九頁
一南蠻船二艘入津之事　二七〇頁
一大村領邪宗門之者刑罰之事　二七七頁
一豐後ヨリ邪宗門之類族送來事　二七八頁
一踏繪鑄造事　二七八頁
一諳厄利亞（ヱゲレス）船入津之事　二七九頁
一阿媽港ヨリ伊勢之者送來事　二八〇頁
一薩摩ヨリ異人送來事　二八二頁
一唐船ヨリ呂宋（ロソン）漂着之日本人送來事　二八四頁

第八卷目錄

阿蘭陀方來歷之部

一阿蘭陀人並諳厄利亞（ヱゲレス）人渡海之事　二八七頁
一阿蘭陀船平戸着船並御朱印令頂戴事　二八八頁
一再度御朱印被下賜事　二八九頁
一阿蘭陀本國並咬留吧（ジヤカタラ）之事　二九〇頁
一阿蘭陀船圖附船役之次第　二九三頁
一交易往來之諸處里數產物之事　二九四頁
一阿蘭陀向後平戸ヨリ長崎ニ被移事

一江府拜禮之事　三〇〇頁
一南部ヨリ阿蘭陀人被差送事　三〇二頁
一出島屋敷修造之事　三〇四頁
一出島境内軒數土藏數等之事　三〇五頁

第九卷目録

阿蘭陀船入津並雜事之部

寛永十八年ヨリ同二十年迄三ヶ年　三〇九頁
正保元年ヨリ四ヶ年　三一〇頁
慶安元年ヨリ四ヶ年　三一一頁
承應元年ヨリ三ヶ年　三一二頁
明暦元年ヨリ三ヶ年　三一二頁
萬治元年ヨリ三ヶ年　三一三頁
寛文元年ヨリ十二ヶ年　三一四頁
延寶元年ヨリ八ヶ年　三一八頁
天和元年ヨリ三ヶ年　三一九頁
貞享元年ヨリ四ヶ年　三一九頁
元禄元年ヨリ十六ヶ年　三二〇頁
寶永元年ヨリ七ヶ年　三二三頁
正德元年ヨリ五ヶ年　三二四頁
享保元年ヨリ二十ヶ年　三二五頁
元文元年ヨリ五ヶ年　三三二頁
寛保元年ヨリ三ヶ年　三三三頁
延享元年ヨリ四ヶ年　三三四頁
寛延元年ヨリ三ヶ年　此年迄百拾ヶ年　三三五頁
寶暦元年ヨリ十三ヶ年　三三七頁
明和元年ヨリ　三四〇頁

第十卷目録

唐船方來歷之部

一日本唐國往返之事　三四三頁
一唐國輿地圖並諸省府縣之事　三四五頁
一外國奥湊諸處之事　三五三頁
一唐船圖附船具船中人衆之事　三五五頁

一海路更數並古今唐國渡リ湊之説　三五六頁
一唐船長崎湊來着之事　三五八頁
一唐人船宿並宿町附町之事　三五九頁
一唐通事始之事　三六〇頁
一長崎渡來儒士醫師等之事　三六二頁
一日本住居唐人之事　三六四頁
一唐人屋敷造營之事　三六六頁
一唐人屋敷境内棟數等之事　三六八頁

第十一卷目録

唐船入津並雜事之部

寛永十三年ヨリ同二十年迄八ヶ年　三七三頁
正保元年ヨリ四ヶ年　三七四頁
慶安元年ヨリ四ヶ年　三七五頁
承應元年ヨリ三ヶ年　三七六頁
明暦元年ヨリ三ヶ年　三七六頁
萬治元年ヨリ三ヶ年　三七七頁
寛文元年ヨリ十二ヶ年　三七八頁
延寶元年ヨリ八ヶ年　三八〇頁
天和元年ヨリ三ヶ年　三八二頁
貞享元年ヨリ四ヶ年　三八三頁
元禄元年ヨリ十六ヶ年　三八三頁
寶永元年ヨリ七ヶ年　三八七頁
正德元年ヨリ五ヶ年　三八八頁
享保元年ヨリ二十ヶ年　三九〇頁
元文元年ヨリ五ヶ年　四〇二頁
寛保元年ヨリ三ヶ年　四〇五頁
延享元年ヨリ四ヶ年　四〇六頁
寛延元年ヨリ三ヶ年此年迄百拾五ヶ年　四〇九頁
寶暦元年ヨリ十三ヶ年　四一〇頁
明和元年ヨリ　四一七頁

第十二卷目録

日本ヨリ異國渡海之部

一異國渡海御免之事　四二五頁
一津田又左衞門暹羅渡海之事　四二六頁
一荒木宗太郎廣南渡海之事　四二七頁
一臺灣ヨリ阿蘭陀人捕來事　四二七頁
一異國渡海一切御制禁之事　四三〇頁

異國船並異國人來着之部

一暹羅ヨリ金札船來着事　四三一頁
一國姓爺（コクセンヤ）使者船來着事　四三一頁
一日向ヨリ波丹人送來事　四三二頁
一紀州ヨリ異國船人送來事　四三四頁
一薩摩ヨリ異國人送來事　四三四頁
一伯耆ヨリ異國船送來事　四三五頁
一薩摩ヨリ異國人送來事　四三五頁
一暹羅船ヨリ廣南人助ヶ來事　四三六頁
一薩摩ヨリ漂着船人送來事　四三六頁
一薩摩ヨリ異人送來事　四三七頁

唐國ヨリ日本人送來之部

一廣東船ヨリ薩摩ノ者送來事　四三七頁
一高州船ヨリ薩摩ノ者送事　四三八頁
一普陀山船ヨリ讃岐ノ者送來事　四三八頁
一宋居勝（ソンクウラウ）船ヨリ長門ノ者送來事　四三九頁
一廣東船ヨリ筑後ノ者送來事　四三九頁
一廣東船ヨリ奥州ノ者送來事　四四〇頁
一乍浦船ヨリ薩摩ノ者送來事　四四〇頁
一寧波船ヨリ南部ノ者送來事　四四一頁
一寧波船ヨリ仙臺ノ者送來事　四四二頁
一廣東船ヨリ相馬ノ者送來事　四四四頁
一乍浦船ヨリ豆州ノ者送來事　四四六頁
一乍浦船ヨリ呂宋（ロウソン）漂着ノ者送來事　四四七頁
一乍浦船ヨリ志摩ノ者送來事　四五一頁
一上海船ヨリ奥州並總州ノ者送來事　四五三頁

一乍浦船ヨリ呂宋漂着之者拾七人送來事　四五四頁
一安南船ヨリ外國漂着之者七人送來事　四五六頁

第十三卷目錄

年表擧要　一

元龜元庚午年ヨリ同三壬申年迄三年
天正元癸酉年ヨリ同十九辛卯年迄十九年
文祿元壬辰年ヨリ同四乙未年迄四年
慶長元丙申年ヨリ同十九甲寅年迄十九年
元和元乙卯年ヨリ同九癸亥年迄九年
右元龜元年ヨリ元和九年迄共ニ五拾四年　四六三頁

第十四卷目錄

年表擧要　二

寛永元甲子年ヨリ同二十癸未年迄二十年
正保元甲申年ヨリ同四丁亥年迄四年
慶安元戊子年ヨリ同四辛卯年迄四年
承應元壬辰年ヨリ同三甲午年迄三年
明暦元乙未年ヨリ同三丁酉年迄三年
萬治元戊戌年ヨリ同三庚子年迄三年
寛文元辛丑年ヨリ同十二壬子年迄十二年
延寶元癸丑年ヨリ同八庚申年迄八年
天和元辛酉年ヨリ同三癸亥年迄三年
右寛永元年ヨリ天和三年迄共ニ六拾年　四八三頁

第十五卷目錄

年表擧要　三

貞享元甲子年ヨリ同四丁卯年迄四年
元祿元戊辰年ヨリ同十六癸未年迄十六年
寶永元甲申年ヨリ同七庚寅年迄七年
正德元辛卯年ヨリ同五乙未年迄五年
享保元丙申年ヨリ同二十乙卯年迄二十年
元文元丙辰年ヨリ同五庚申年迄五年
寛保元辛酉年ヨリ同三癸亥年迄三年
右貞享元年ヨリ寛保三年迄共ニ六拾年　五二七頁

第十六卷目錄

年表擧要　四　　五八一頁

延享元甲子年ヨリ同四丁卯年迄四年
寛延元戊辰年ヨリ同三庚午年迄三年
寶曆元辛未年ヨリ同十三年癸未年迄十三年
明和元甲申年ヨリ

寫眞目錄

長崎湊惣圖　二頁—三頁
町割圖
追加南蠻船入津圖　四頁—五頁
追加長崎湊異國船入津圖　八頁—九頁
西御役所圖　三八頁—三九頁
立山御役所圖　三八頁—三九頁
岩原御役所圖　三八頁—三九頁
西泊御番所圖　四〇頁—四一頁
戸町御番所圖　四〇頁—四一頁
道生田壇硝藏圖　四四頁—四五頁
石火矢臺圖　四六頁—四七頁
野母御番所圖　五〇頁—五一頁
烽火山御番所圖　五〇頁—五一頁
小瀨戸御番所圖　五二頁—五三頁
御船藏圖　五四頁—五五頁
北瀨崎御用米藏圖　六二頁—六三頁
南瀨崎並柵門等圖　六二頁—六三頁
大波戸圖　六六頁—六七頁
新地土藏圖　六八頁—六九頁
稻佐壇硝藏圖　六八頁—六九頁
梅ヶ崎圖　七〇頁—七一頁
追加慶長十四年七月二十五日阿蘭陀人渡海御朱印　二八八頁—二八九頁
阿蘭陀船圖　二九二頁—二九三頁
唐國圖
追加阿蘭陀船圖　三一二頁—三一三頁
鳥船　三五四頁—三五五頁
沙船　三五四頁—三五五頁
唐人屋敷圖　三六八頁—三六九頁
出島屋敷圖

長崎實錄大成　第一卷

田邊八右衛門茂啓編輯

長崎建始御料所ニ被仰付之部

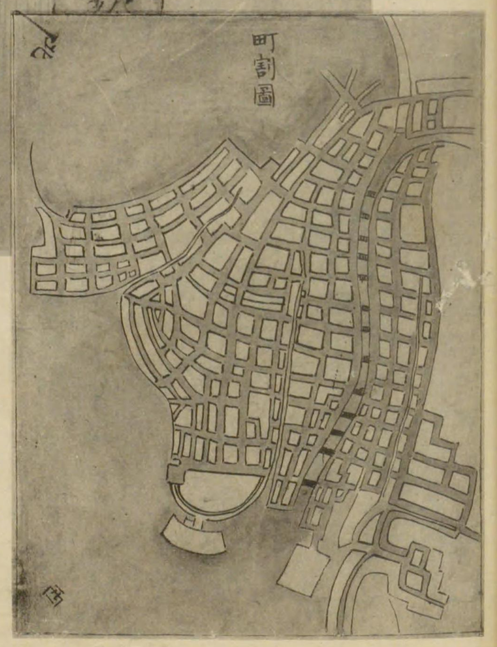
長崎開基之事

長崎の舊稱及び別名に關する說

一西海道九州肥前國彼杵郡長崎元之名ハ深江浦ト云リ。其地極西ノ邊僻ニテ往昔世ニ知ル人稀ナル故古代ノ事實分明ニ傳來無之。或書ニ此地古代瓊杵田津深津江ト云シ由書載セリ。一說ニ此所元ノ名ハ玉ノ浦ト云シ由。當時渡海ノ唐人長崎ヲ瓊浦ト稱セリ。于茲年來ノ舊記古老ノ傳語等ヲ徧ク考ヘ合スルニ古昔長崎小太郎戸町藤次郎千綿太郎時津四郎浦上小大夫是等ノ武士兵亂ヲ避テ此邊境ニ流落シ鄕民等ヲ從ヘ懷ケ自カラ其所ノ領主地頭ノ如ク成來リ此地ノ農夫漁人等他方ニテ長崎者ト云習ハシ遂ニ此所ノ名ト成シト也。此小太

舊記古老の傳說

長崎湊惣圖



町割圖

長崎氏

郎十代ノ孫左馬助實子無之有馬左衛門佐ノ三男ヲ養子トシ家督ヲ嗣シメ左馬助ト名付其子甚左衛門十二代ノ孫也。其妻ハ大村民部少輔純忠ノ息女ナル由。然ルニ天文年中如何ナル故ニヤ甚左衛門將軍義輝公ノ命ニ背ク事有テ長崎ヲ立退キ筑後ニ流落セシ由。其時長崎ノ地ヲ大村家ニ給ルト云云。

一說ニ甚左衛門緣者タルヲ以テ大村ニ退去セシトモ云リ。

一舊說ニ文治年中右大將頼朝卿六十六箇國ノ惣追捕使ニ補セラレ諸國ニ守護ヲ立庄園ニ地頭ヲ置ル、時ニ當テ家人長崎小太郎ニ此地ヲ被給ト也。其後北條家足利家興廢數百年ノ間諸國大ニ亂レ九州ニハ菊池少貳大友島津ノ輩各武威ヲ競テ兵革止事無之。此時小家ハ大家ニ從ヒ弱者ハ强者ニ困ルヽト云ヘトモ長崎氏遂ニ他ノ幕下ニ屬セス。甚左衛門馬場村ニ居屋敷ヲ建（今時庄屋ノ居宅其屋敷ノ跡也ト云）春德寺山上ニ城郭ヲ構ヘ家人等ハ馬場村中川村片淵村ニ扶持シ置シト云リ。然ルニ近方ニ深堀ト云在所（長崎ヨリ南方三里）領主ヲ茂宅ト云。又高濱ト云在所（長崎ヨリ南方六里）領主三浦ノ末葉トテ互ニ數百人ヲ催シテ合戰數度ニ及フト云ヘトモ遂ニ勝負ヲ決セス。且又文祿元年島原町ニ一ノ堀豐後町ニ二ノ堀勝山町ニ三ノ堀ヲ修築ス。是ヲ三ノ尾ノ要害也ト云云。

長崎甚左衛門の城郭と屋敷

文祿元年一ノ堀、二ノ堀、三ノ堀修築したりと云ふ傳說

評ニ曰。古昔小太郎此地ニ流落セシ由。又一說ニ賴朝卿家人小太郎ニ此地ヲ被給ト有リ。兩說何レヲ正實トスヘキヤト。答曰。賴朝卿惣追捕使ニ被補ハ文治元年ニテ今寶曆ニ至リ五百五十餘年ニ及ヘリ。如何シテ其實ヲ知者有ン乎。然レトモ歷代ノ治亂土地ノ形勢ヲ察シ舊記ノ諸說ヲ參ヘ考ルニ賴朝卿十三歲豆州ニ配流アリ。年ヲ經テ義兵ヲ擧ケ壽永二年木曾義仲入洛有テ平家悉ク都ヲ落下リ西海ニ於テ滅ヒ失給ヒ遂ニ源氏ノ御代ト成リ文治元年賴朝卿三十八歲惣追捕使ニ補セラレ建久三年四十五歲征夷大將軍ニ任セラレ正治元年五十二歲ニテ薨去アリ。然レハ源氏ノ御政務五畿七道諸國切要ノ郡府ニ及フヘキニ賴朝卿治世ヨリ薨去マテ僅二十餘年也。此年月ノ間ニ遠境海濱ノ僻地ヲモ一々點檢在テ此長崎ノ小邑ヲ家人ニ被配給迄ニハ如何、行屆クヘキヤ。然レハ此地ニ流落ノ武士數代領主ノ如ク成來シ事尤信用スヘキ者歟。舊說ニ春德寺山上ニ城郭ヲ構シ由。今其跡ヲ見ルニ累々タル嵒石ニテ方四五間ノ平地モ無之斥候遊覽ニハナルトモ城取リ屋形造營成ヘキヤ。仍テ數年彼邊ノ地形ヲ察シ老年ノ農樵等ニ委シク尋問シニ馬場村大路ヨリ左ニ當テ向フ上リノ道有之。是門前ノ道筋ト見ヘ春德寺ノ境內甚左衞門屋形

ノ地ナルヘシ。馬場村庄屋ノ屋敷地ハ家中從僕等ヲ置シ長屋ノ跡ナルヘシト也。又其近邊ニ松山矢氣山ト云二所ニ砦等ヲ構ヘシニヤ今所々石垣ノ跡殘レリト也。且又要害ノ爲町中ニ三ノ堀ヲ修築セシ由。然レトモ若深堀高濱ヨリ人數ヲ催ス事アラハ巽ノ方ノ山道ヨリ輙ク寄來リ又ハ船手ヨリ艮ノ方ノ山際ニ傍テ押寄ル者ナラハ町中ニアル三ノ堀ノ要害ハ更ニ詮ナキ事也。元來此地ハ西南ニ差出タル岬岡ニテ森林ヲ伐開キ地形ヲ引均シ段々町數ヲ建廣メシ所ナル故町中ニ五七段或ハ十四五段ノ坂有テ平面ノ地ニ非サル事顯然タリ。凡ソ野山高低ノ地ニ湧泉有テ或ハ堀池ノ如ク水溜リシ所アル者ナリ。然ルニ長崎平面ノ地ニ要害ノタメ態ト三ノ堀ヲ修築セリト云説尤誤ナルヘシ。且ツ此地昔年僅ナル家居ノ漁人樵人等數百人ヲ催テ合戰ニ及フト云事是又信用成カタシ。但諸處ノ鄕人等互ニ其境目ヲ爭シト見ヘテ今時島々鄕村ノ内大村領深堀領長崎領入交リシ跡アリ。夫長崎興隆ノ根元ハ南蠻船當湊ニ渡來リ商賣ニ事寄セ邪宗門ヲ勸ントノ惡執專ラナリシヲ秀吉公御聞ニ達シ邪徒ノ頭人ヲ本國ニ追返シ邪宗門爲二嚴禁一ノ旨上使ヲ差越シ其後御奉行所ヲ建ラレ遂ニ南蠻船日本渡海一切御停止被仰付追テ

松山、矢氣山二ケ所に砦をかまへたるならと云ふ説

追加　南蠻船入津圖

鎖國以前長崎地圖ノ一部

古賀十二郎所藏

唐船阿蘭陀船ヲ長崎一方ニ被令着船ヨリ以來萬國交易通用ノ場ト成リ日本國中唐國外國マテモ其聞ヘアル要津ト成來レリ。

元龜元年南蠻船入津

一元龜元庚午年長崎湊ニ南蠻船始テ着岸シ商賣ヲ遂ケ向後長崎ヲ渡リノ津ニ定タキ旨領主大村理專ニ願フ故翌年三月家來友永對馬ヲ長崎ニ遣シ地割ヲ初メ島原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀨浦町、六町建之。其後博多町、樺島町、今町、五島町、内下町出來シ二十餘年ヲ經テ文祿ノ初ニ至リ二十三町出來ス。町々頭人ニハ高木勘右衞門、後藤惣太郎、高島四郎兵衞、高木新七、町田宗賀、白倉如庵、吉岡九兵衞、馬場甚兵衞、須川主水、山本庄左衞門等也。此内高木高島後藤町田四人町年寄ト成ル。

元龜二年長崎町割

町々頭人

舊說ニ元龜二年町割有シ時島原町ハ有馬修理大夫建之大村町ハ大村理專建之由見ヘタリ。評ニ曰其頃長崎ハ大村家ノ領地ナルニ有馬家ヨリ島原町ヲ建大村家ヨリ大村町一町ヲ建其外諸處ノ者此地ニ來テ心ノ儘ニ町造リスヘキ理有之哉。是年々出來セシ町筋ノ内ニ同鄕親族ノ者近隣ニ集リ住テ或ハ島原ノ者或ハ大村ノ者住居セシ町筋ヲ自然ト其町名ニ呼習セシ由也。

町割に關する田邊氏の說

一遂年諸方ヨリ來集テ住居ヲ願フ者多ク成シ故慶長二年以來田畠ノ地ニ町割

慶長二年以來田畠の地に町割

右に對し地子銀上納

有之元和ノ初ニ至リ四十町出來シ定免ノ地子銀ヲ上納セシム。

秀吉公被禁邪宗門長崎御料所ニ被仰付事

天正十五年の條目

一天正十五丁亥年秀吉公爲征伐島津九州ニ發向有シ凱陣ノ時筑前博多ニ暫ク御逗留有之。其頃長崎ノ頭人共博多ニ參上シ御目見ヲ願フ由然ルニ於彼地御老中ニ無禮ヲ成セシ故如何ナル者ゾト御詮議有之處彼者共ハ數年長崎ノ地ニ南蠻船ヲ相付ケ切支丹ノ邪法ヲ信用シ神社佛寺ヲ破却シ所ノ取捌ヲモ心儘ニ計フノ旨御聞ニ達シ甚以不法至極也トテ右ノ頭人共即刻被追立伴天連共ハ早々可令歸國旨長崎表ニ藤堂佐渡守ヲ被差遣御條目ヲ以急度被仰渡之。

校訂者云ふ。松浦伯爵家文書により原本「切支丹」とあるを「きりしたん」と訂正す

定

一日本者神國たる處きりしたん國より邪法授ル儀甚以不可然事。

一其國郡之者を近付門徒ニなし神社佛閣を打破らせ前代未聞ニハ。國郡在所知行等給人ニ被下ル儀者當座之事ニ候。天下よりの御法度相守諸事可得其意ル處ニ下々として猥義曲事事。

一伴てゞ其智惠之法を以心さし檀那を持ハと被思召候處如右日域之佛法を相破ル事曲事ル條伴てゞ儀日本之地ニハおかせらゞ間敷候間今日より廿日之間ニ用意仕可歸國ル。其中に下々伴てゞニ不謂族申懸るもの在之ハ曲事さるへき事。

一黑船之儀ハ商買之事ル間各別ル之條年月を經諸事賣買ル さすへき事。

一自今以後佛法之さはさけを不成輩ハ商人之儀ハ不及申いつゞおてもきりしさん國よりゞ往還くるしからゞセル條可得其意事。

天正十五年六月十九日

長崎

一同十六戊子年寺澤志摩守藤堂佐渡守兩人被差越長崎御料地ニ被仰付之旨重テ御條目ヲ以被仰出爲御代官鍋島飛驒守ニ長崎御預ケ置ル。

天正十六年長崎御料所となる

定

一當所御料所ニ被仰付候上は非分之儀有之間敷事。

一有樣之御公物納所申上迄横役不可有之事。

附リ地子は得上意可免之。

一當所之儀此兩人ニ被仰出候間爲代官鍋島飛驒守ニ預ケ置候間何茂可得其意事。

天正十六年五月十八日の定

校訂者云ふ。原本月日なし。同前訂正す

一黑船之儀前々の如くたるへき之間地下人令馳走當所ゟ可相付候事。
一自然下々として不謂儀申懸る者有之共一切承引仕間敷事。
右之旨相背輩於有之者急度兩人方ゟ可申越候堅ク可申付者也。仍而如件。

天正十六年五月十八日　　戸田民部少輔勝隆
　　淺野彈正少弼長吉

長崎町中地子免許
長崎町中より年始御禮

一同年長崎町中地子御免許之御朱印下シ賜ル。是ヨリ毎年長崎町中ヨリ年始之御禮ニ參上ス。
長崎ゟ黑船如先々相着之可致商賣並當津地子之事被御免除畢。猶淺野彈正少弼戸田民部少輔可申者也。

天正十六年閏五月十五日　　長崎惣町

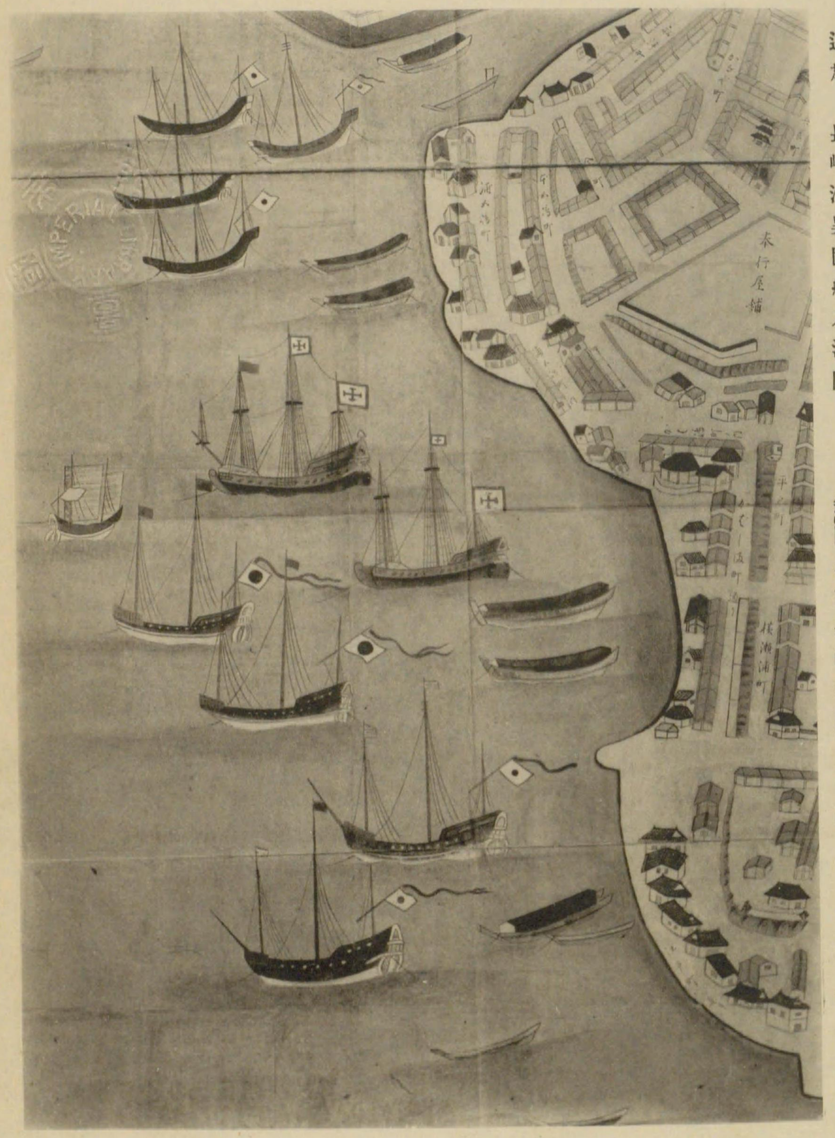
長崎御奉行始並異國往來御免之事

寺澤志摩守長崎奉行となる

一文祿元壬辰年寺澤志摩守初テ長崎御奉行被仰付其後唐津城地拜領有之長崎ニハ家老物頭等差遣シ折々自身立越仕置等被申付之。

異國渡海

一天正文祿ノ頃ヨリ京堺長崎ノ商人共御朱印ヲ賜リ爲商賣廣南、東京、六昆、東埔



追加　長崎湊異國船入津圖

鎖國以前長崎地圖ノ一部

古賀十二郎所藏

寛永十三年異國渡海一切禁制

寨(チヤタ)、太泥(タイニ)、臺灣(ワンシヤム)、暹羅(シヤムロ)、呂宋(ソンア)、阿媽港(マカハ)等ニ渡海御免有之(レ)處寛永十三年向後日本ヨリ異國渡海一切御制禁之旨仰出サル。是迄凡ソ四十餘年ニシテ此事斷絶セリ。

村山東安長崎御代官相願之事

村山等安長崎代官となる

一文祿元壬辰年秀吉公爲(ニ)征伐朝鮮唐津名護屋(ナゴヤ)ニ御在陣有之(レ)。其節長崎中爲(ニ)惣代(一)頭人ノ内爲窺(レ)(ニ)御機嫌(一)參上仕タキ旨御内意窺ヒ奉リ則御免有之(レ)。其頃村山安東ト云者藝州ヨリ長崎ニ來リ頭人方ニ心安ク出入セリ。此者才智辯舌諸人ニ超(コヘ)タル者ナル故今度爲(ニ)名代(一)此安東ヲ名護屋ニ可(ニ)差上(一)ト談セシニ安東其意ヲ得テ彼表首尾宜シク相調來ルヘシト請合テ名護屋ニ到リ長崎中爲(ニ)惣代(一)參上仕ルノ旨執成(トリナシ)ヲ賴ミ入献上物等ヲ差上ル。秀吉公御聞ニ達シ首尾能御目見被(ニ)仰付其後秀吉公東安ト被(ニ)召呼(ヨハ)シカバ名ヲ拜領仕難有(キ)(レ)仕合也トテ是ヨリ東安ト相改ル。數日滯留ノ間ニ機ヲ窺ヒ其身長崎頭人タル樣ニ申シ成シ鄕地支配ノ御願申上シカハ願之通長崎御代官被(ニ)仰付(一)。仍テ向後御地子銀二十五貫目宛年々上納仕タキ旨願叶ヘテ歸宅セリ。

一説ニ文祿元年秀吉公名護屋ニ御在陣ノ時長崎頭人共參上セシニ無禮ノ

村山等安代官任命に關する田邊氏の說

事有テ追返サル。依之爲御詑言安東ヲ差上ノ處首尾能御目見被仰付其身長崎之頭人ト僞リ御代官蒙仰ト云云。評ニ曰。彼頭人共博多ニ參上セシハ天正十五年ノ事也。名護屋御在陣ハ文祿元年ニテ六年以後ノ事ナレハ年代相違セリ。彼頭人共ハ其身長崎領主ノ如ク心得違テ推參シ御咎ヲ蒙レリ。假令東安如何ナル才智辯舌アリトモ御咎ヲ蒙リ其一年之內間モナク容易ニ御免有テ御目見可相叶哉。東安此度參上ノ六年以前天正十六年ヨリ長崎御料所ニ被仰付是ヨリ毎年始御禮相勤來事ナル故今度參上ノ事モ奉窺御內意御免有之由ナリ。舊記ニ右兩樣ヲ同年ノ事ト傳說アルハ甚相違也。

末次平藏代官となる

末次平藏御代官跡役蒙仰事附流罪之事

一元和二丙辰年末次平藏長崎御代官被仰付。但去ル文祿元年ヨリ當年迄廿五年村山東安御代官相勤之處平藏ト諍論ノ事有テ於江府對決被仰付東安方過半利運ト成リ御裁判モ可相極ノ處平藏訴ヘ出ルハ先年東安嫡子邪宗門ニ歸服セシ事露顯ニ付蠻國ニ流刑被仰付ノ處東安密ニ船ヲ仕立沖中ニテ彼嫡子ヲ奪ヒ取リ自宅ニ隱シ置剩ヘ大坂御陣ノ時件ノ嫡子ヲ城內ニ籠置玉藥等ヲ差上シ段言上セシカバ東安陳スルニ詞ナク直ニ江府ニテ御仕置被仰付長崎ニ有之親族共モ悉ク被斬罪其節平藏ニ御代官被仰付。然ル處延寶四丙辰年平藏三代目ニ至リ罪有テ父子共ニ隱岐ニ流罪被仰付。第十四卷ニ見ヘタリ

延寶四年末次平藏茂朝流罪

唐船長崎一方ニ令着津並日本ヨリ異國渡海御停止之事

一寬永十二乙亥年唐船是迄九州諸處ニ往來セシ處向後長崎湊一方ニ着船シ一切他方ニ渡海御停止仰付ラル。

寬永十二乙亥年唐船長崎以外渡來停止

一同十三丙子年御奉書到來ニテ向後日本ヨリ異國渡海一切御停止被仰出猶又切支丹御制禁ノ旨其外御條目之趣被仰渡之。

寬永十三年丙子年日本より異國へ渡海一切禁止及びキリシタン宗門禁制

定

一異國ハ日本之船遣候儀堅停止之事。

一日本人異國ハ不可遣候。若忍候而乘渡者於有之ハ其身ハ死罪其船並船主共ニ留置可言上事。

一異國ハ渡海住宅仕日本人來候ハヽ死罪可被申付事。

一吉利支丹宗旨有之所ハ從兩人可被遂穿鑿事。

一吉利支丹訴人褒美之事。

伴天連之訴人ニハ其品ニより或ハ三百枚或ハ貳百枚たるへし。其外ハ此已前之如く相計可被申付事。

一異國船申分有之而江戸ゟ言上候之間番船之事此以前のことく大村ゟ可申越事。

一伴天連法弘候南蠻人其外惡名之者有之時は如前々大村之籠ニ可入置事。

一伴天連之儀船中之改迄入念可申付事。

一南蠻人子孫日本ニ不殘置樣ニ堅可申付事。若令違背殘置族於有之者其者ハ死罪一類之者科之輕重ニより可申付事。

一南蠻人長崎ニ而持候子並右之子共之内養子ニ仕族ハ父母等悉雖爲死罪身命を助南蠻人ゟ被遣候間自然彼者共之内重而日本ゟ來歟又ハ書通をる者於有之は本人ハ勿論死罪親類已下迄隨科之輕重可申付事。

一諸色一所ニ買取儀停止之事。

一武士之面々於長崎異國船之荷物唐人前より直ニ買取儀停止之事。

一異國船荷物之書立江戸ゟ注進賣買可申付事。

一異國船ニ積來候白糸直段を立候而不殘五ヶ所其外書付之所割符可遣事。

一糸之外諸色之儀糸之直段極候而之上相對次第商賣可仕。但唐船は小船之事ニ候間見計可申付事。

附荷物之代物直段立候而之上可爲廿日切事。

一異國船戻リゟ儀九月廿日切若遲來船ハ着候而五十日切。但唐船ハ見計加利宇多ゟ少跡ニ出船可申付事。

一異國船賣殘之荷物預ヶ置候儀も又預リ候儀も停止之事。

一五ヶ所惣代之者參着之儀可爲七月五日切。夫ゟ遲ク參候者ニハ割符をはづし可申事。

一平戸ゟ着候船茂長崎ニ而直段立候半以前ニ賣買停止之事。

以上

原本長月とあれ共町年寄藥師寺家古文書によりて七月に作る

寛永十三年五月十九日

加賀守
豐後守
伊豆守
讃岐守

榊原飛驒守殿　大炊頭
馬場三郎左衛門殿

阿蘭陀船平戸ヨリ長崎ニ被移事

阿蘭陀人平戸より長崎出島に移る

一寛永十八辛巳年阿蘭陀船是迄三拾三ヶ年平戸ニ往來セシ處向後長崎湊ニ可令着船之旨被仰渡之

但唐船阿蘭陀船並朝鮮船共ニ何國へ令漂着共其所ヨリ換船ヲ相添長崎御奉行所ニ可送屆旨被仰出。其外諸外國船並人共ニ何方ニ漂着ノ節モ可準之。

歷代御奉行之事

歷代奉行

寺澤志摩守廣高　長崎御奉行始

文祿元壬辰年ヨリ慶長七壬寅年十一ヶ年在勤。

小笠原一庵

慶長八癸卯年ヨリ同十乙巳年迄三ヶ年在勤。

長谷川左兵衛廣智

慶長十一丙午年ヨリ同十九甲寅年迄九ヶ年在勤。

長谷川權六

長谷川權六守尙

元和元乙卯年ヨリ寛永二乙丑年迄十一ヶ年在勤。

水野河內守守信

寛永三丙寅年ヨリ同五戊辰年迄三ヶ年在勤。

竹中采女正重興

寛永六己巳年ヨリ同九壬申年迄四ヶ年在勤。

曾我又左衛門古祐

今村傳四郎正長

寛永十癸酉年在勤翌年兩人共ニ御役御免

榊原飛驒守職直　曾我氏替

寛永十一甲戌年ヨリ同十五戊寅年迄五ヶ年在勤。

神尾內記元勝　今村氏替

寛永十一甲戌年一ヶ年在勤

仙石大和守久隆　神尾氏替

寛永十二乙亥年一ヶ年在勤

馬場三郎左衛門利重　仙石氏替

寛永十三丙子年ヨリ慶安四辛卯年迄十六ヶ年在勤。但是迄每年南蠻船滯留中在勤ニテ六月上旬長崎到着。同十月中旬歸府有之處寛永十四年十一月島原一揆籠城ニ付榊原氏馬場氏同十二月五日長崎着。同七日島原表ニ出陣有之。此以後年中在勤ト成ル。此年與力五騎同心二十人被仰付之。

與力五騎同心二十人任命

大河内善兵衛　榊原氏替

寛永十六巳卯年一ヶ年在勤

柘植平右衛門正時　大河内氏替

寛永十七庚辰年ヨリ同十九壬午年迄三ヶ年在勤。

山崎權八郎正信　柘植氏替

寛永二十癸未年ヨリ慶安三庚寅年迄八ヶ年在勤之處其年十月十七日於長崎卒去。春德寺葬送。

山崎權八郎長崎にて逝去

黑川與兵衛正直　山崎氏替

東西兩役所

慶安四辛卯年ヨリ寛文四甲辰年迄十四ヶ年在勤。但寛文三年兩御役所共ニ燒失ニ付新ニ東屋敷建、西屋敷建直リ、是ヨリ西東兩御役所ト成ル。

甲斐庄喜右衛門正述　馬場氏替

承應元壬辰年ヨリ萬治二己亥年迄八ヶ年在勤。

妻木彦右衛門　甲斐庄氏替

萬治三庚子年ヨリ寛文元辛丑年迄二ヶ年在勤。

島田久太郎守政　妻木氏替

寛文二壬寅年ヨリ同五乙巳年迄四ヶ年在勤。

稲生七郎右衛門　黑川氏替

寛文五乙巳年在勤之處翌年二月十七日於長崎卒去。光源寺葬送。但巳年ヨリ與力十騎、同心三十人ニ被仰付之。

稲生七郎右衛門正倫長崎にて逝去

寛文五乙巳年より與力十騎同心三十人となる

下曾根三十郎

寛文六丙午年二月稲生氏卒去ニ付天草領主戸田伊賀守長崎表押ヘノ爲到着アリ。同四月下曾根氏其砌筑後久留米ニ爲御目付在留之處御下知有テ長崎ニ來着シ假ニ支配被仰付ニ付戸田氏ハ歸國セリ。同年六月松平甚三郎御

奉行替リ役蒙仰到着ニ付下曾根氏ハ直ニ歸府有之。

松平甚三郎　稲生氏替

寛文六丙午年ヨリ同十庚戌年迄五ヶ年在勤。

河野權右衞門通定　島田氏替

寛文六丙午年ヨリ同十一辛亥年迄六ヶ年在勤。

牛込忠左衞門勝登　松平氏替

寛文十一辛亥年ヨリ延寶八庚申年迄十ヶ年在勤。但延寶元年立山屋敷建。從

是西、立山、兩役所ト成ル。

岡野孫九郎貞明　河野氏替

寛文十二壬子年ヨリ延寶七己未年迄八ヶ年在勤。

川口攝津守宗恒　岡野氏替

延寶八庚申年ヨリ元祿六癸酉年迄十四ヶ年在勤。但元祿三年以後長崎御奉行諸大夫任敘定例ト成ル

宮城監物　牛込氏替

天和元辛酉年ヨリ貞享三丙寅年迄六ヶ年在勤。

松平氏、諱、隆見

延寶元年立山屋敷建つ。西、立山、兩役所となる

元祿三年以後長崎奉行諸大夫任敘定例となる

大澤左兵衞長崎にて逝去

貞享四年より長崎奉行交代前安禪寺に引移る事となる

同年與力同心廢止奉行自分抱の給人下役と成る

貞享四年奉行一人新規增加三人となる。二人長崎在勤、一人江戸詰

大澤左兵衞基哲　宮城氏替

貞享四丁卯年在勤之處同年五月廿八日於長崎卒去。晧臺寺葬送。

山岡對馬守景助　大澤氏替

貞享四丁卯年ヨリ元祿七甲戌年迄八ヶ年在勤。但貞享四年ヨリ交代前安禪寺ニ引移直ニ歸府有之。同年ヨリ與力同心相止御奉行自分抱ヘノ給人下役ト成ル。

宮城越前守　新規

貞享四丁卯年一人被召加御奉行三人ト成リ二人長崎在勤、一人在府ナリ。元祿八乙亥年迄九ヶ年在勤。

近藤備中守用章　川口氏替

元祿七甲戌年ヨリ同十四辛巳年迄八ヶ年在勤。

丹羽遠江守長守　山岡氏替

元祿八乙亥年ヨリ同十五壬午年迄八ヶ年在勤。

諏訪下總守　宮城氏替

元祿九丙子年ヨリ同十一戊寅年迄三ヶ年在勤ノ處同年八月御召ニテ御役

儀御免。

大島伊勢守義也　諏訪氏替

元祿十二己卯年ヨリ同十六癸未年迄五ヶ年在勤。

林土佐守忠朗　新規

元祿十三庚辰年一人被召加御奉行四人ト成リ二人長崎在勤、二人在府ナリ

元祿十三年より長崎奉行一人增加四人となり、二人長崎在勤、二人江戸詰

同十六癸未年迄四ヶ年在勤。

永井讃岐守直允　近藤氏替

元祿十五壬午年ヨリ寶永六己丑年迄八ヶ年在勤。

別所播磨守常治　丹羽氏替

元祿十六癸未年ヨリ寶永七庚寅年迄八ヶ年在勤。

石尾阿波守氏信　大島氏替

寬永元甲申年ヨリ同二乙酉年迄二ヶ年在勤。

佐久間安藝守信就　林氏替

寶永元甲申年ヨリ正德二壬辰年迄九ヶ年在勤、替リ役無之、翌巳年ヨリ御奉行三人ト成リ、二人長崎在勤、一人在府也。

正德三年より長崎奉行三人となり、二人長崎在勤、一人江戸在府

駒木根肥後守昌秀　石尾氏替

寶永三丙戌年ヨリ正德四甲午年迄九ヶ年在勤、替リ役無之、翌未年ヨリ御奉行二人ト成リ、一人長崎在勤、一人在府也。

久松備後守定持　永井氏替

寶永七庚寅年ヨリ正德五乙未年迄六ヶ年在勤。

大岡備前守清雄　別所氏替

正德元辛卯年ヨリ享保元丙申年迄六ヶ年在勤。

石河土佐守政鄕　久松氏替

享保元丙申年ヨリ同十乙巳年迄十ヶ年在勤。

日下部丹波守博貞　大岡氏替

享保二丁酉年ヨリ同十一丙午年迄十ヶ年在勤。

三宅周防守康敬　石河氏替

享保十一丙午年ヨリ同十六辛亥年迄六ヶ年在勤。同十三年ヨリ下役ノ名目相止足輕ト成ル。

享保十三年より下役の名稱止み、足輕となる

渡邊出雲守永倫　日下部氏替

享保十二丁未年ヨリ同十三戊申年迄二ヶ年在勤。

細井因幡守安明　渡邊氏替

細井因幡守長崎にて逝去

享保十四己酉年ヨリ元文元丙辰年迄八ヶ年在勤之處其年九月十八日於長崎卒去。本蓮寺葬送。

大森山城守時長　三宅氏替

享保十七壬子年ヨリ同十八癸丑年迄二ヶ年在勤。

窪田肥前守忠任　大森氏替

享保十九甲寅年ヨリ寛保元辛酉年迄八ヶ年在勤。

萩原伯耆守美雅　細井氏替

元文二丁巳年ヨリ寛保二壬戌年迄六ヶ年在勤。

田付阿波守景厖　窪田氏替

寛保二壬戌年ヨリ延享四丁卯年迄六ヶ年在勤。

松波備前守正房　萩原氏替

寛保三癸亥年ヨリ延享三丙寅年迄四ヶ年在勤之處其年三月廿七日於長崎卒去。大音寺葬送。

松波備前守長崎にて逝去

安部主計頭一信　松波氏替

延享四丁卯年ヨリ寛延三庚午年迄四ヶ年在勤。

松浦河内守信正　田付氏替　御勘定奉行ヨリ兼帶

寛延元戊辰年ヨリ寶暦元辛未年迄四ヶ年在勤。翌壬申年在府ニテ長崎御用加役ニ被仰付御加增五百石御役料千俵被下置之處癸酉二月御役儀被召放兩度之御加增被召上小普請ニ入閉門被仰付之。

菅沼下野守定秀　安部氏替

寶暦元辛未年ヨリ同六丙子年迄六ヶ年在勤。

大橋近江守親義　松浦氏替

寶暦二壬申年ヨリ同三癸酉年迄二ヶ年在勤。

坪內駿河守定央　大橋氏替

寶暦四甲戌年ヨリ同九己卯年迄六ヶ年在勤。

正木志摩守康恒　菅沼氏替

寶暦七丁丑年ヨリ同十二壬午年迄六ヶ年在勤。

大久保土佐守忠與　坪內氏替

御勘定奉行より兼帶

長崎御用加役

寶暦十庚辰年ヨリ同十一辛巳年迄二ヶ年在勤。

石谷備後守清昌　大久保氏替　御勘定奉行ヨリ兼帶

寶暦十二壬午年ヨリ

大岡美濃守忠移　正木氏替

寶暦十三癸未年ヨリ在勤、翌年六月十二日於長崎卒去。大音寺葬送。

大岡美濃守長崎にて逝去

新見加賀守正榮　大岡氏替

明和二乙酉年ヨリ

上使並目付

上使並御目付之事

藤堂佐渡守

右者天正十五年邪宗門御制禁之旨以御條目被仰出之節到着有之。

寺澤志摩守

藤堂佐渡守

右者天正十六年長崎御料所被仰付之旨重而御條目ヲ以テ被仰出之節到着有之。

初め鍋島飛驒守信生後加賀守直茂

鍋島飛驒守

爲御代官天正十六年ヨリ同十九年迄長崎御預ケ置ル。

間宮權左衞門

右者慶長十九年諸國ニテ捕置シ邪宗門ノ者共阿媽港ニ流刑被仰付之節到着有之。

山口駿河守

右者同年長崎地内ニ建置シ切支丹寺拾一ヶ所燒捨被仰付之節到着有之。

松平伊豆守

寛永十五年島原一揆退治之後長崎ニ被立越諸處見分之上野母並烽火山御番所令建ラル。

寛永十五年松平伊豆守野母番所及び烽火山番所を建てしむ

太田備中守

右者同年南蠻船日本渡海一切御制禁之趣被仰渡在津之南蠻人不殘被追返之節到着有之。

井上筑後守

右者寛永十六年南蠻船三艘入津ス。去年渡海御制禁之旨被仰渡之處押而渡

來段不屆至極ニ付急度可令歸帆旨被仰渡且又長崎ニ有之諳厄利亞人之種子五拾人蠻國ニ被相渡之節到着有之。

加々爪民部少輔

右者寛永十七年南蠻船一艘入津ニ付船中ノ者ハ斬罪船ハ燒捨被仰付之節到着有之。

井上筑後守

右者正保四年南蠻船二艘渡海御免之爲願入津ス。江府言上有之處決シテ御免無之、尤使者船之事故不及死罪事靜ニ可有仕置トノ御奉書被成下之節到着有之。

朽木民部

富松彌五左衞門

右者慶安三年巡見上使

岡野孫九郎　七月十四日着

井上新右衞門　同　十七日發駕

青山善兵衞

右者寛文七年巡見上使

寛文七年御料鄕地巡見使高林又兵衞、向井八郎兵衞七月十二日着同十七日發足。

奥田八郎右衞門　七月朔日着

戸川坐之亟　同十一日乘船

柴田七左衞門

右者天和元年巡見上使

戸田又兵衞　四月五日着

小田切善兵衞　七月　發駕

右者貞享元年當地商賣方爲見分到着有之。

御勘定頭荻原近江守　四月十一日着

御目付林藤五郎　同廿五日發駕

右者元祿十二年唐阿蘭陀商賣方爲見分到着有之。

御勘定中川吉左衞門、御徒目付高木十郎左衞門、同年十月二日着商賣方爲吟味勘定屋敷在留。辰五月五日發足。

御若年寄稲垣對馬守
御大目付安藤筑後守　四月廿日着
御勘定頭荻原近江守　同廿七日發駕
御目付石尾織部

右者元祿十六年爲當地見分到着有之。

小田切靱負　七月朔日着
土屋數馬　同七日乘船
永井監物

右者寶永七年巡見上使

正德三年御料鄕地巡見使古郡孫大夫、庵原八兵衞、伊東新六、六月廿五日着。同廿九日發足。

御大目付仙石丹波守　未二月廿三日着
御目付石河三右衞門　三月十一日發駕

御勘定頭木村四郎兵衞、平勘定八木淸五郎、原新六。四月十八日發足

御徒目付大平彌五兵衞、田澤藤九郎、御小人四人。

右者正德五年唐船方船數銀高等御新例被改定向後以信牌可令渡海並阿蘭陀方銀高銅高等被改定之。

石河三右衞門　直ニ長崎在勤
大久保一郎右衞門　八月十九日着　翌申閏二月七日發駕

右者同年、岩原御屋敷新ニ建、御目付在勤。

柴田七左衞門　閏二月三日着　同八月廿八日發駕
日下部作十郎　八月廿五日着　翌酉二月廿五日發駕

右者享保元年御目付岩原在勤。

妻木平四郎　六月十一日着
大島采女　同廿一日發駕
小倉忠右衞門

右者享保二年巡見上使

享保二年御料鄕地巡見使齊木彦内、鈴木忠左衞門、神谷淸大夫、三月十八日着同廿二日發足。

渡邊外記　三月九日着、四月朔日筑前ニ越、五月廿四日長崎ニ歸。

岩原屋敷新に建つ

御徒目付高倉孫三郎　同九月二日發駕。
同　岡田源七郎　七月三日乘船平戸五島見分八月二日長崎ニ歸。
右者享保三年岩原到着有之。長門、豊前、筑前三領ニ漂流唐船爲追擊彼地ニ越ラル。
筧新太郎　二月十六日着。　翌子三月二日發駕。
妻木平四郎　八月廿六日着。
右者享保四年御目付岩原在勤。　同八月廿七日發駕。
平岩七之助　二月廿八日着。　翌丑二月廿五日發駕。
石野八大夫　八月廿三日着。
右者享保五年御目付岩原在勤。　同八月五日發駕。代リ無之。
宮崎七郎右衞門　二月廿一日着。　翌辰二月廿九日發駕。
右者享保六年御目付岩原在勤。
三宅大學　十一月十八日着。
御徒目付中山平左衞門
右者享保八年御目付岩原在勤。

大森半七郎　九月十六日着。　翌亥五月十六日發駕。
御徒目付早川庄次郎
右者享保十五年御目付岩原在勤。　翌戌二月五日發駕。
駒井靱負　七月三日着。
御勘定小野左大夫　御徒目付野間覺兵衞
右者寛保元年爲勘定吟味岩原在勤。
遠藤六郎右衞門（御勘定吟味役）　閏十二月九日着。　翌寅六月三日發駕。
御勘定勘野喜六　宮川源内
右者延享二年爲勘定吟味岩原在勤。
德永平兵衞　六月十七日着
夏目藤右衞門　同廿六日乘船
小笠原内匠
右者延享三年巡見上使
延享三年御料郷地巡見使大井十左衞門　近藤與左衞門　伴勘七。寅五月十二日着

△御勘定組頭早川庄次郎　御勘定町野惣右衞門　久保田十左衞門　御小人松浦氏附
一人。十月五日着。翌未九月廿六日發足。外ニ、御勘定小倉伴内右同日着。先達テ翌未正月廿九日發足
右者寛延三年御奉行松浦氏ニ相添岩原在勤。
菅沼新三郎　十月十六日着。直ニ長崎在勤。
右者寛延三年爲御目付在勤之處翌未二月廿五日御奉書到來。長崎御奉行蒙仰直ニ長崎在勤。
御徒目付星野宇右衞門。右同日着。翌未四月廿九日發足。
右者同年御目付ニ相添在勤之處菅沼氏御奉行被蒙仰ニ付星野氏江府御窺之上翌年四月歸府有之。
鵜殿十郎左衞門　三月五日着。同九月廿一日發駕。
御徒目付倉橋與四郎
右者寶曆七年御目付岩原在勤。
青山七右衞門　五月十四日着
神保帶刀
花房兵右衞門　同　廿日乘船
右者寶曆十一年巡見上使
寶曆十一年御料鄕地巡見使成瀨久藏　岩本彌三郎　薄井文次郎　四月十三日着同十六日發足。
△支配勘定益田新助　篠木六左衞門　御普請役長岡丈兵衞　内藤源八石谷氏附
十月五日着。翌未十一月廿八日發足。
右者寶曆十二年御奉行石谷氏ニ相添岩原在勤。
△支配勘定益田新助　岸本彌三郎　御普請役内藤源八　佐久間甚八　八月石谷氏附
廿一日着。右者明和元年御奉行石谷氏相添岩原在勤。
揖斐十大夫、　二月六日着。　三月廿四日發足豐後御代官
右者明和二年爲檢地御用岩原在留。
△支配勘定金子富右衞門　御普請役上條幸十郎　八月十五日着。同廿八日、益田新助　内藤源八發足。
右者明和二年交代

△支配勘定北角松之亟　御普請役樋口宇右衞門　四月十六日着。同廿五日岸本彌三郎　佐久間甚八發足。

△支配勘定市野七十郎　御普請役今泉又三郎　九月八日着。同廿五日金子富右衞門　上條幸十郎發足。

右者明和三年交代

△支配勘定加藤左市　御普請役早川富三郎　三月廿七日着。四月十六日北角松之亟　樋口宇右衞門發足。

長崎實錄大成　第二卷

田邊八右衞門茂啓編輯

御役所諸御番所等造營之部

御奉行御屋敷之事

奉行屋敷

一文祿元壬辰年ヨリ寛永九壬申年迄四拾餘年ノ間ハ御奉行御一人ニテ御役屋敷ハ本博多町ニ有之。寛永十年曾我氏今村氏兩人御奉行被蒙仰ニ付右ノ屋敷ヲ二ツニ分テ兩屋敷ト成ル。然ル處其年今村氏屋敷ヨリ出火ニテ隣屋敷其外五六町燒通リ、今ノ西屋敷其頃ハ江戸大坂絲割符宿老會所ナリシニ此屋敷モ類燒セリ。仍テ西屋敷ノ地ニ御役所二ヶ所被建、本博多町ノ地ヲ宿老共替地ニ被相渡之。

西濱町川岸端に奉行下屋敷建つ貞享四年與力同心止み此處明屋敷となる

一寛永十五年與力同心被仰付ニ付西濱町川岸端ニ御奉行下屋敷ヲ被建與力同

心衆差置ル。其後貞享四年與力同心相止、此所明屋敷ト成ル。

寛文三年の大火の節奉行所類燒

一寛文三年火災ノ節兩御屋敷共ニ類燒ス。依之今ノ船番屋敷ハ高木作右衞門屋鋪ナリシニ江戸町ノ内五ケ所ノ屋敷ヲ加ヘテ東屋敷ヲ建、高木方ニハ川岸端ノ屋敷ヲ渡シ、五ケ所之町人ニハ西濱町築地ヲ相渡、西屋敷ノ地内ニ一ケ所ヲ建。是ヨリ西東兩御屋敷ト成ル。

西東兩役所

西役所惣坪

西御役所惣坪數千六百七拾九坪

御本屋	六棟	土藏	四棟
御門長屋	一棟七部屋	東長屋	一棟六部屋
向長屋	一棟三部屋	厩長屋	一棟二部屋
南長屋	一棟五部屋	中長屋	一棟六部屋
大波戸石垣上	一棟七部屋		

以上

右ノ地内ニ最初兩御屋敷有シニ寛文三年一ケ所ニ建直サレ船番屋敷地ニ東屋敷ヲ建。是ヨリ西東兩屋敷ト成ル。其後延寶六年類燒ニ付修覆アリ。又元祿十一年屋敷内ヨリ出火ニ付造營有之。

延寶六年類燒、元祿十一年屋敷内より出火

一寛文十一辛亥年御奉書到來有之。

立山屋敷建つ

此已前於其許井上筑後守罷在候屋敷兩奉行下屋敷ニ被下之候間天草こぼち家小川藤左衞門所ゟ取寄之長屋作事等可被申付候。藤左衞門方ゟは右之通御勘定奉行ゟ相達候。委細從河野權右衞門可申越候。可被存其趣候以上。

板　内膳正
土　但馬守
久　大和守
稲　美濃守

十二月廿四日

牛込忠左衞門殿

外ニ末次平藏ニ御書被成下、是迄ノ東屋敷ヲ此地ニ移シ、天草毀屋敷ヲ取寄セ長屋等ニ用之、作事料ハ御闕所銀ノ内ヨリ忠左衞門手形ヲ取リ入用ノ度々相渡シ造リ畢リノ上員數證文可差出旨被仰下之。延寶元癸丑年普請成就シ立山御屋敷ト稱ス。

延寶元年立山屋敷普請成就

夫ヨリ四拾五年後破損甚キニ付享保二年ヨリ翌年迄不殘作リ替被仰付屋敷中地形高低ナク引均シ、本屋長屋全ク造替被仰付之。

享保二、三兩年造替ハ、地形高低引均す

立山屋敷坪數

立山御役所　坪數三千二百七拾八坪半

山之内三千二百五拾四坪半

合六千五百三拾三坪

御本屋	九棟	土藏	五棟
東長屋	一棟六部屋	向長屋	一棟四部屋
御門長屋	二棟三部屋	南長屋	一棟四部屋
西長屋	一棟七部屋	厩長屋	一棟四部屋
足輕長屋	一棟四部屋		

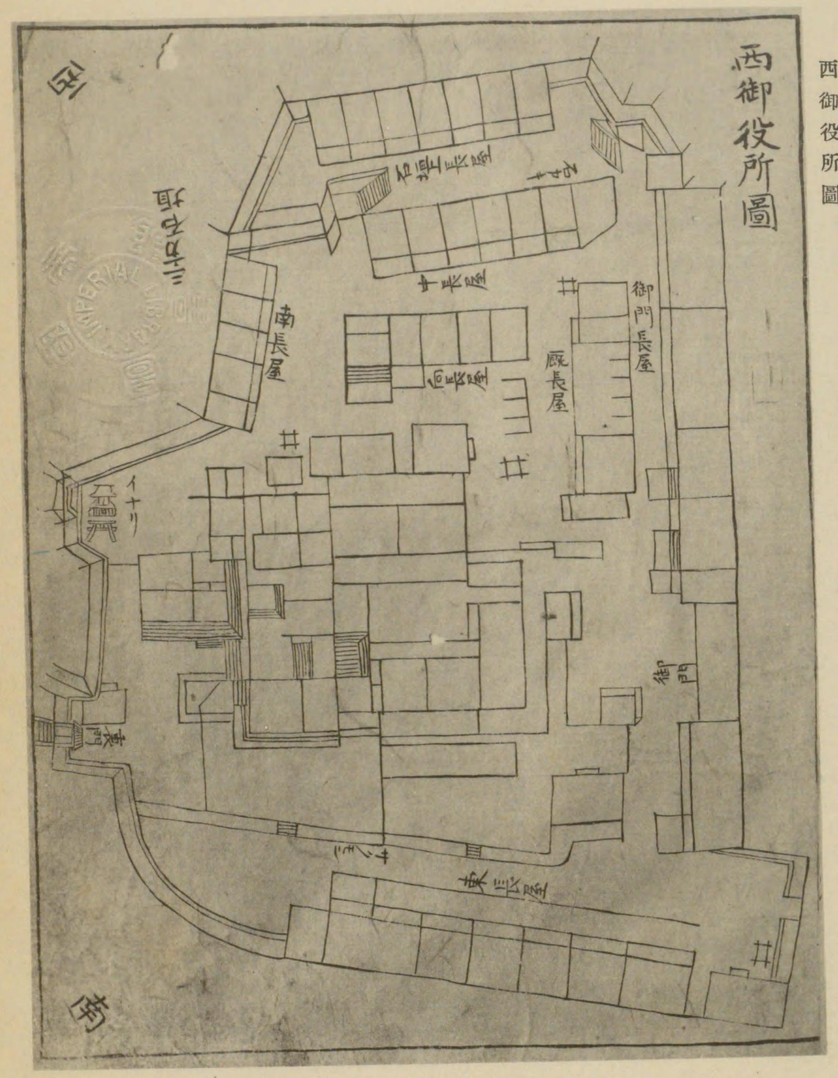
以上

右延寶元年此地ヲ開キ是迄ノ東屋敷ヲ此處ニ移シ立山屋敷ト稱ス。其後享保二年屋敷内悉ク平地ニ均シテ本屋長屋全ク造替ラル。

正德五乙未年岩原目付屋敷建つ

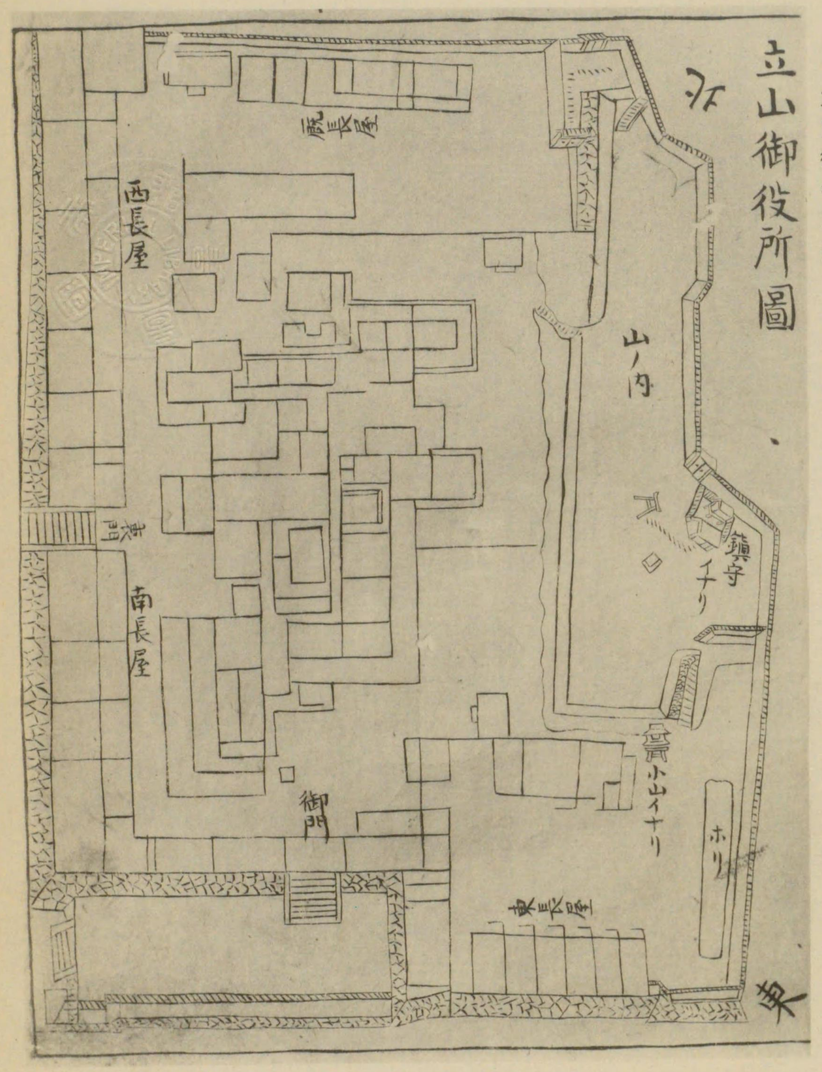
岩原御目付屋敷之事

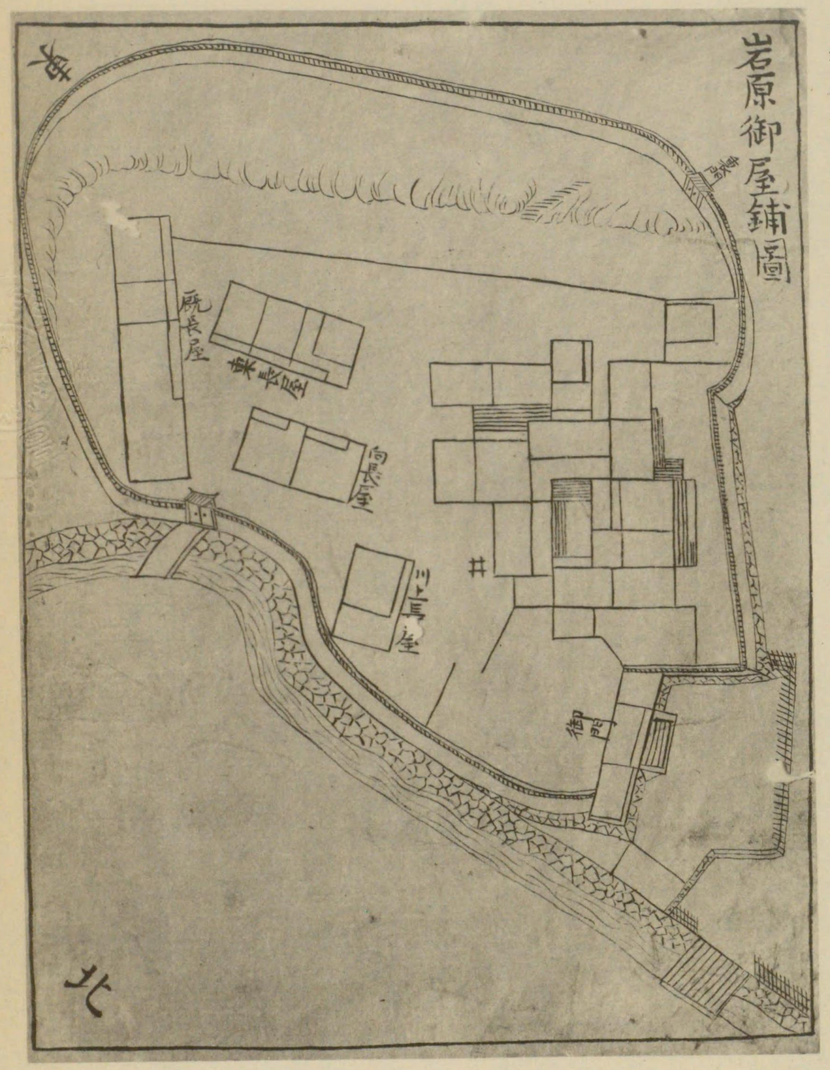
一正德五乙未年新ニ岩原御屋敷被建之。御目付又ハ御勘定方御役宅ト成ル。



西御役所圖

立山御役所圖




岩原御屋鋪圖
東
西
南
北
馬場
馬場
馬場

惣坪數八百六拾三坪

御本屋　一棟　土藏　一棟

東長屋　一棟一部屋　向長屋　一棟二部屋

川上長屋　一棟一部屋　厩長屋　一棟四部屋

以上

西泊戸町御番所造營之事

黑田忠之上意を蒙り西泊及び戸町番所を造營す

一寛永十八辛巳年八月筑前城主松平右衞門佐忠之蒙　上意西泊戸町兩所ニ御番所被建。

但寛永十五年南蠻船渡海一切御制禁被仰付之處、翌十六年爲御免之願令入津ニ付即刻被追返シニ、其翌十七年又々爲願着船セシ故江府御窺ノ上蠻人共ハ被斬罪、本船ハ燒捨被仰付。仍テ重テ蠻船令入津ハ急度可被擊沈旨ニテ今年新ニ御番所被令建之。

鍋島勝茂黑田氏と隔年に交代勤務

一同十九壬午年肥前城主鍋島信濃守勝茂蒙　上意御番所隔年ニ可被相勤之旨。

但毎年四月交代有之。

黑田、鍋島兩家立會にて番所普請

一慶安元戊子年兩家立會ニテ御番所堅固ニ普請有之。石火矢大綱等武備之用意尤嚴厲ナリ。

但最初ヨリ六七年ノ間ハ小屋掛ニテ當番限リニ造替有之處、去年正保四年南蠻船着津ニ付筑前守ヲ初西國在城ノ大名當表ニ到着有之。在府ノ諸家ヨリモ家老物頭足輕等大勢被差越、湊內外諸處ニ在陣シ、兵船數多繫置、湊口ノ東西ニ船橋ヲ掛ケ、江府御下知ヲ被相待シニ、七月廿八日　御奉書到來ニテ向後共ニ決シテ渡海御免無之間、重テ渡來マシキ旨嚴密ニ被仰渡、八月六日歸帆被仰付。仍テ今年堅固ニ御普請有之。（第七卷ニ見ヘタリ）

西泊番所　長崎領淵村之內

外廻ノ二百二拾一間四尺四寸

坪數

但坪數三千八百七拾坪

二軒　番頭鉄砲頭　三軒　石火矢玉藥藏

三軒　足輕頭　五軒　足輕

二軒　裏表木戸番　一軒　遠見番

二軒　水主　一軒　石火矢臺並小屋道具入

西泊御番所圖

戸町御番所圖

石火矢數

合拾九軒

石火矢數　二拾二挺

但玉重目一貫八百目巣中ヲ頭ニシテ二百目迄

戸町番所外廻坪數

戸町御番所　大村領之内

惣外廻リ百九拾間

但坪數二千八百四拾坪

二軒　番頭　鉄砲頭　三軒　石火矢玉藥藏

四軒　足輕頭　四軒　足輕

二軒　役人　二軒　裏表木戸番

一軒　水主　一軒　石火矢臺並小屋道具入

石火矢數

合拾九軒

石火矢數　拾七挺

但玉重目一貫七百目巣中ヲ頭ニシテ三百目迄

兩番所詰人數

一兩御番所ニ相詰人數中老ヲ始物頭鉄砲大頭馬廻リ頭大組鉄砲頭其外侍都合二拾五人程

足輕百六拾人程　　水主三百二拾人程

其外役人又者共ニ　千人程

船數三拾艘程

内

四拾二挺立　　拾五艘程

荷船三百石積　　拾二三艘程　　平太船　二艘

但年々不同有之

附深堀在番之事

深堀在番

一西泊ヨリ海上二里程南方ニ當テ深堀ト云在所アリ。是ハ鍋島家老深堀氏某ノ領所ナリ。（高三千石ヲ領ス）毎年此處ニモ鍋島本家ヨリ番頭在勤有テ船數人數等ヲ相具シ不時ノ備ヘニ令勤番テ（ニ）ル（ル）。尤黑田家當番ノ年モ鍋島家ヨリ深堀在番アル事同前タリ。

道生田（シヤウグ）鹽硝藏之事

道生田鹽硝藏

元祿二年木鉢郷の内道生田に鹽硝藏建つ

一元祿二己巳年八月十一日申刻西泊遠見番所ヨリ西方五六間脇ニ雷落ル。依之御番所圍（カコミ）ノ内ニ鹽硝有テハ重テ雷火等ノ事モ無覺（キ）束（ニ）旨江府御窺之上翌年鍋島家當番ノ節西泊ヨリ七町西ノ方木鉢（キバチ）浦ノ内道生田ト云所ニ土藏ヲ建テ兩御番所ノ鹽硝ヲ入置ル。但兩家立會ニテ御普請有之。

黑田、鍋島兩家立會にて普請

惣廻リ五町拾間

土藏　二棟　桁行二間　梁間一間半

番所　一軒一間方

外廻リ東南北三ヶ所高札

外廻リ東南北三ヶ所御高札

覺

一御鹽硝藏近邊ニ無用之輩徘徊仕間敷事

一農業ニ出候者共御鹽硝藏近邊ニ而たはこの火等ニ至る迄火之元猥ニ致間敷事

一堀切ゟ内無用して一切出入仕間敷事

附リ堀切之内ニおゐて野燒堅ク致間敷候

右條々急度可相守之若違背之者於有之ゑ可爲曲事者也

元祿三年十月　日

西ノ方海際御高札

此あかり場に用船之外寄せ申間敷者也

午十月　日

右構ノ内火ヲ禁スル事嚴密ナル故番ノ者朝夕ノ賄ヒ等御番所ヨリ通船ニテ運ヒ送シム。

石火矢臺修築之事

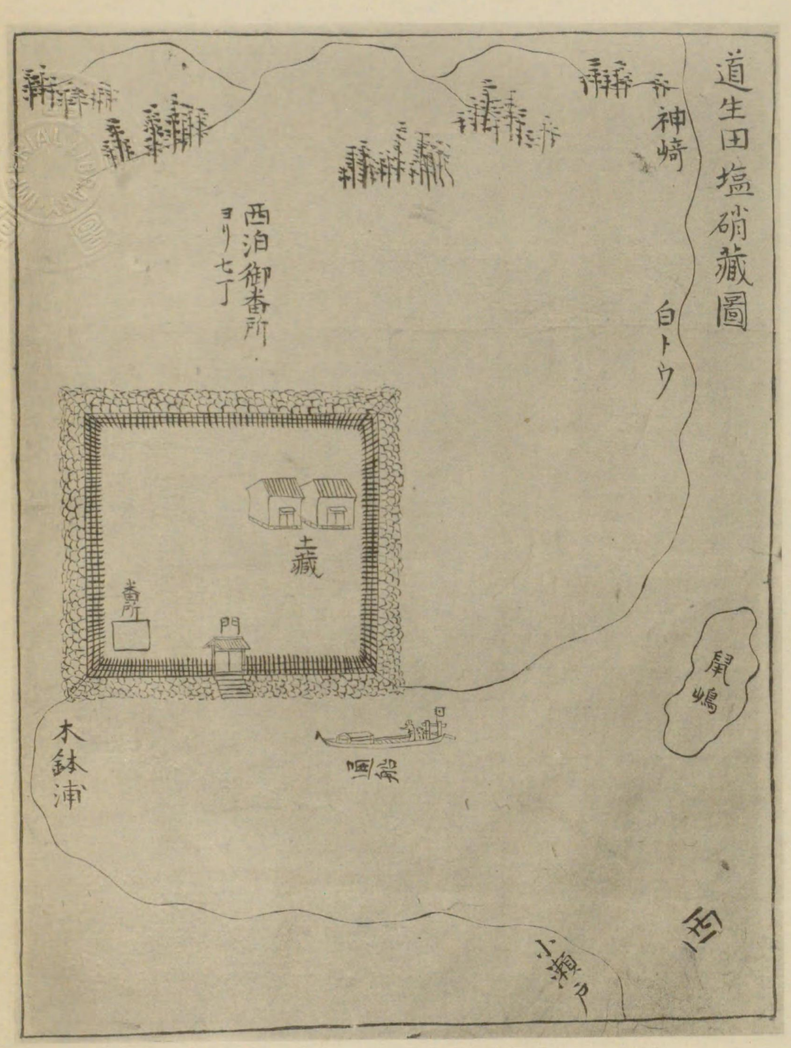
石火矢臺修築

一承應二癸巳年平戸城主松浦肥前守鎮信蒙リ上意ニ當湊ニ南蠻船其外惡船渡來リ御下知ニ依テ可被撃沈節ノ支度ノ爲異國船沖ヨリ乘入ル左右ノ海邊湊内ニ三ケ所湊外ニ四ケ所各地形高サ七八尺入五間横拾七八間程ニ築立テ石火矢臺都合七ケ所ヲ修セラル。但外廻リ柵ヲ振リ内ニ高札アリ。

一番　大多越　長崎領　湊内　西泊リ坤方

二番　女神　大村領　湊内　戸町ヨリ西方

三番　神崎　長崎領　湊口　西側ノ出崎



道生田塩硝藏圖

但右ノ女神ヨリ神崎ノ男神マテ、其間海上三丁四十二間、正保四年船橋掛リシ所也。

四番　白崎　大村領　湊外　南側

五番　高鉾　深堀領　湊外　申方ニ當ル島

六番　長刀岩　同　同　未方ニ當ル香燒島ノ内

七番　陰ノ尾　同　同　同斷

以上

長崎領大多越神崎二ケ所高札

此石垣ニあかるへからす。並捨石取ましく候。若違背之輩あらは可爲曲事者也。

十一月　日

大村領女神白崎二ケ所高札

此御石垣ニあかり申間敷候。並捨石取候儀無用之事。

右違背者於有之者急度御奉行所ニ可申上者也。

大村左兵衛　判

長崎領大多越及び神崎二ケ所高札

大村領女神・白崎二ケ所高札

延寶七年未九月　日　　大村彦右衞門　判
大村內匠　判

深堀領高鉾長刀岩陰ノ尾三ケ所高札

此御臺場石垣ニ一切あかるましく候。且又捨石取候儀堅可爲停止。若違背之輩有之者他方之人ニ候ハヽ、御奉行所可申上候。於當領之者ハ急度可爲曲事者也

延寶六年　　鍋島志摩　判
二月廿一日

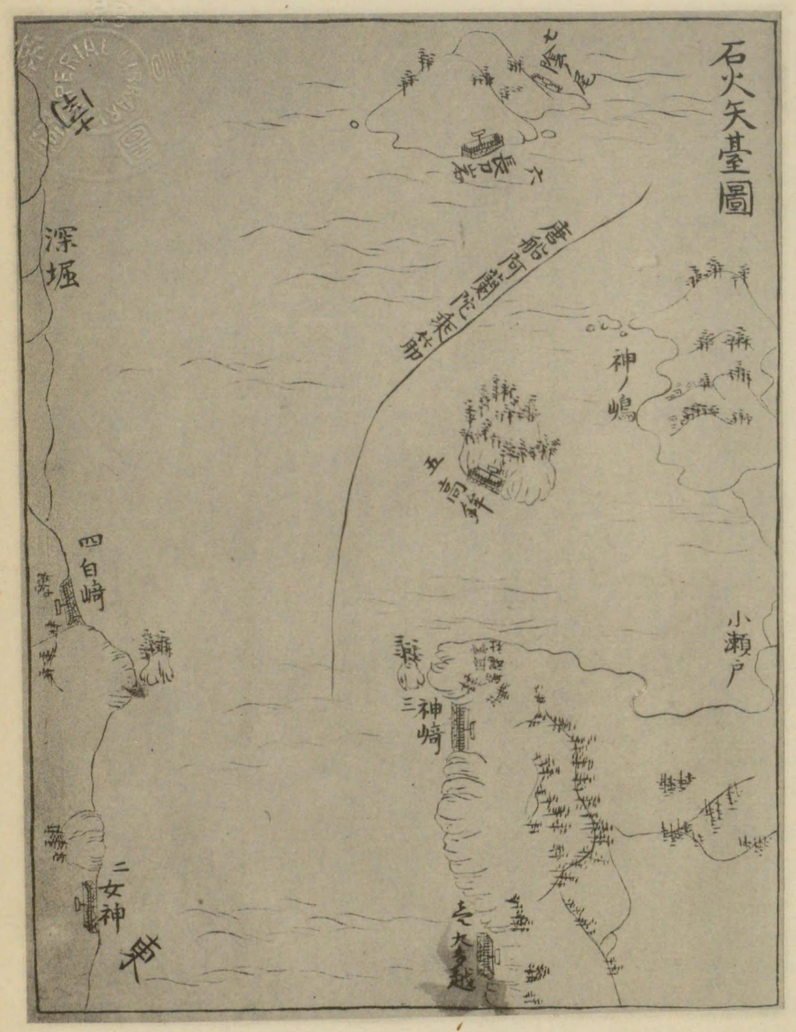
深堀領高鉾、長刀岩、陰ノ尾三ケ所高札

湊內御用船之事

湊內御用船

一寬永十六己卯年肥後城主細川越中守忠利、島原城主高力攝津守忠房、天草領主山崎甲斐守家俊、蒙上意當湊ニ御用船二艘宛、半年ハ肥後ヨリ被差出、半年ハ島原天草兩所ヨリ一艘宛被差出之處、同十八年甲斐守所替被仰付、天草御料地ト成ル。此年ヨリ八ケ月肥後ヨリ二艘被差出、四ケ月島原ヨリ一艘被差出之。寬文九年島原ニ松平主殿頭所替被仰付、其以後前格ノ通島原ヨリ四ケ月被差出

石火矢臺圖



之。

享保五年より肥後一手にて年中一艘宛差出す

一享保五庚子年松平主殿頭天草郡並肥前御料七ケ村御預リ被蒙仰。其年ヨリ長崎湊御用船之勤御免有之。是ヨリ以後肥後一手ニテ年中一艘宛被差出之。

四十挺立船　一艘

二十挺立船　一艘

合二艘

近國諸家聞役之事

近國諸家聞役十四ケ所

一寛永ノ頃迄ハ諸家ヨリ長崎御奉行所へ書信飛脚等往返之節當表藏屋敷ヨリ輕キ侍又ハ町人等持參セシ處、正保四年南蠻船着津之節諸大名長崎表ニ發向有シ以後十四ケ所ヨリ長崎ニ聞役被差置之。其内六ケ所ハ年中常勤八ケ所ハ五ケ月程被令相勤之。

松平薩摩守　鹿兒島　五月中旬ヨリ九月下旬迄

細川越中守　熊本　年中常勤

松平筑前守　福岡　右同斷

松平信濃守　佐嘉　右同斷
松平大膳大夫　萩　五月中旬ヨリ九月下旬迄
宗　對馬守　府中　年中常勤
有馬中務大輔　久留米　五月中旬ヨリ九月下旬迄
小笠原伊豫守　小倉　年中常勤
立花左近將監　柳川　五月中旬ヨリ九月下旬迄
戸田因幡守　島原　右同斷
水野和泉守　唐津　右同斷
松平肥前守　平戸　年中常勤
大村新八郎　大村　五月中旬ヨリ九月下旬迄
五島淡路守　五島　右同斷

野母並烽火山番所

野母並烽火山御番所之事

一寛永十五戊寅年三月島原一揆征伐以後松平伊豆守長崎ニ被立越諸處見分アリ。野母日野山權現山上ヨリ西南ノ大洋一面ニ見渡ス所ナレハ此所ニ番所ヲ建シメ異國船見掛ケ次第御奉行所ニ可注進旨被仰付。但番人ハ其頃野母ハ寺澤志摩守預リ地ナル故其所ノ百姓共四人宛相勤。仍テ寛永十八年阿蘭陀船當湊ニ移レシ以後入船ヲ見掛次第即刻飛船ヲ以テ注進ス。

一同年長崎ヨリ近國ニ急ヲ告ル狼煙ヲ擧ヘキ爲烽火山番所ヲ令建ラル。番人ハ長崎領ノ百姓二人宛相勤ル。

遠見番及水主召抱

一萬治二己亥年新ニ遠見番人拾人水主拾人被召抱之。但是迄兩所ノ百姓共二十餘年相勤及困窮之旨依相願被差免之。則十善寺村海手ニ長屋拾軒被建。

野母遠見番所　一棟　一間半四方
中宿賄所　一棟　三間ニ四間
霧番所　一棟　是ハ山上霧有テ海上見ヘ難キ時山チ下リ海際ヨリ見渡スヘキ爲建之
遠目鏡　三挺
注進船　二艘　但五挺立
帆　帆中黑ニテ野母御注進船之文字染入

詰番年中二人宛。廿日代リ。唐船歸帆ノ節四人宛六月朔日ヨリ阿蘭陀船入津相揃迄、觸頭隔番十日代リ相勤之。

野母番所高札

番所御高札

條々

一遠見番入念阿蘭陀船入津歸帆之節早速注進可仕事。

一異形之船相見候ハヽ、阿蘭陀船同前可致注進事。

一常々遠見番無油斷相守之、若不審成ル船見出候ハヽ、即刻長崎ニ致注進、庄屋所ニ茂其趣を爲申聞之、海上ニ罷出彌見屆之重而注進可仕事。

一唐船入津歸帆共ニ日本船唐船ニ近寄候ハヽ、早速乘付相改、不審成品於有之者、右之船差留、長崎ニ可致注進事。

附唐船入津歸帆共繫船有之節ハ時を不定夜廻可仕事。

一火之用心堅ク可相慎事。

一公儀之外爲私用百姓獵師等一切遣ふ間敷事。

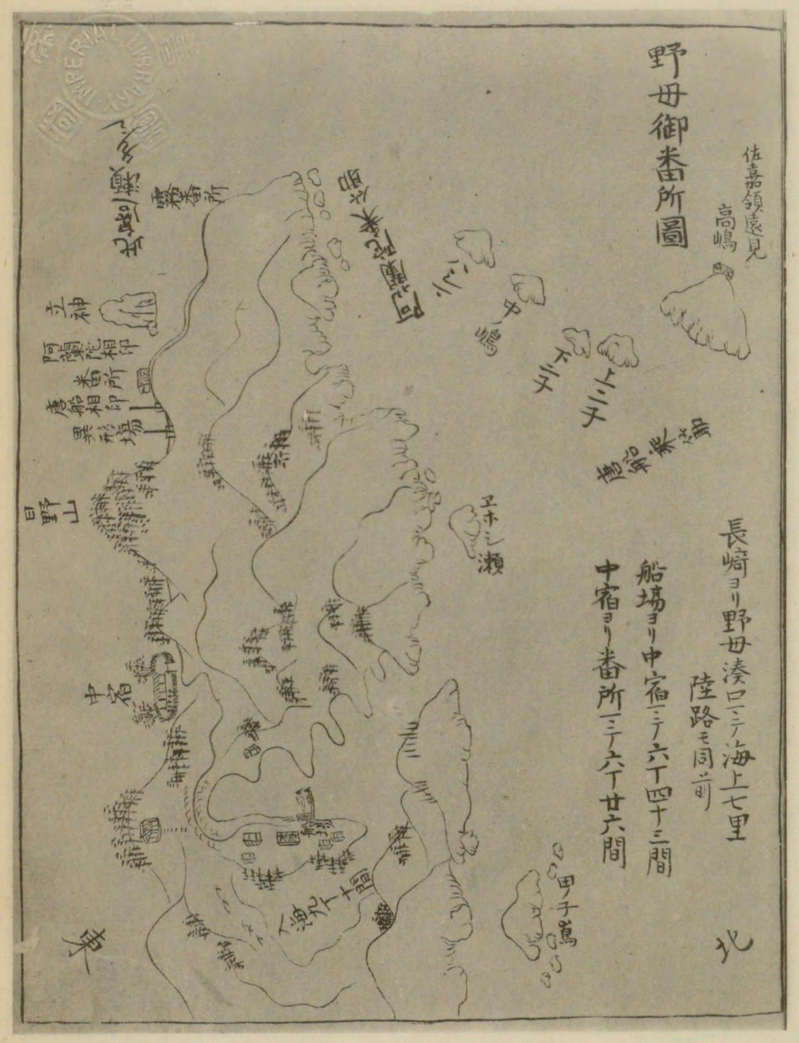
一番所ニ遠見之者並水主等之外無用之輩一切不可差置事。

一喧嘩口論堅ク停止之事。

一博奕賭之諸勝負一切可爲無用事。

右之條々堅可相守之。若違犯之者於有之ハ可爲曲事也。

野母御番所圖



烽火山御番所圖

烽火山番所

元祿元辰年十一月　長崎奉行

烽火山御番所　一棟　二間ニ四間

西ツマニ、二間ニ半間通リ、北軒ノ方ニ、二間ニ一間ノ庇アリ。

新大工町門外ヨリ二本杉マテ二丁四拾間

二本杉ヨリ番所マテ拾五丁七間

番所ヨリ末山竈所マテ四丁

但山上ニ土石ヲ以テ竈所ノ如ク築立テ、一所ヨリ火ヲ入ル口アリ。此所ニ狼煙ヲ擧ル時ノ燒柴ハ、馬場村庄屋方ニ預リ置、不時ニ持運フヘキ支度ナリ。

詰番年中二人宛十日代リ相勤。

烽火山番所高札

番所御高札

條々

一遠見番無油斷可相勤之。若他領之山々ニおゐて不審成ル煙見出候ハヽ、早速其趣可致注進事。

一於番所晝夜共入念火之用心堅ク可相愼事。

一番所ニ女人差置候儀堅ク令停止訖。用事無之者寄合酒宴遊興博奕惣而賭之諸勝負一切仕間敷事。

附公用之外百姓遣ふ間敷事。

右條々堅ク可相守之。若於令違犯者急度曲事可申付之者也。

辰十一月　長崎奉行

明和元年烽火山番所勤番止む

明和元甲申年十月烽火山御番所勤番相止當分取疊ミ置ル。

小瀨戸御番所之事

小瀨戸番所

一元祿元戊辰年小瀨戸浦ノ山上ニ番所被建之。但野母ヨリ阿蘭陀船見掛ケ飛船ニテ令注進之節刻限尤延引ス。依之野母ヨリ入船ヲ見掛ケ相圖ノ印ヲ立小瀨戸番所ニ其印ヲ移シ、又小瀨戸ヨリ十善寺村海邊ニ其印ヲ受、夫ヨリ上筑後町觀善寺内ニ其印ヲ受テ、直ニ御役所ヘ速ニ注進ス。

一今年遠見番十二人相增シ都合二十二人ト成ル。十善寺村山手ニ長屋拾二軒被建。同時水主拾人相增之。

一同二巳巳年向後唐船入船見掛之時モ小瀨戸番所ヨリ可令注進旨被仰付之。

小瀨戸御番所圖

御番所　一棟　一間半四方
中宿賄所　一棟　三間ニ四間
水主小屋　一棟　二間ニ三間
遠目鏡　三挺
注進船　四艘
長崎ヨリ小瀬戸船場迄海上一里八丁余陸路二里余
同船場ヨリ中宿迄二丁
中宿ヨリ番所迄三丁二拾間
詰番年中四人宛十日代リ。但唐船阿蘭陀船歸帆ノ節ハ加番二人相勤

小瀬戸番所高札

御番所御高札

條々

一遠見番入念阿蘭陀船入津出帆之節早速注進可仕事。
一唐船入津之節向後阿蘭陀船同前可致注進事。
一常々遠見番無油斷相守之若不審成ル船見出候ハヽ即刻長崎ニ致注進庄屋所ニ茂其趣を爲申聞之海上ニ罷出彌見屆重而注進可仕事。

一唐船入津歸帆共ニ日本船唐船ゟ近寄候ハヽ早速乘付相改不審成ル品於有之者右之船差留長崎ゟ可致注進事。

附唐船入津歸帆共ニ繫船有之節ハ時を不定夜廻リ可仕事。

一火之用心堅可相慎事。

一公儀之外私用として百姓獵師等一切遣ふ間敷事。

一番所ニ遠見之者並水主等之外無用之輩一切不可差置事。

一喧嘩口論堅ク停止之事。

一博奕賭之勝負一切可爲無用事。

右之條々堅可相守之若違犯之者於有之者可爲曲事者也

元祿元辰年十一月　長崎奉行

御船藏之事

正保四年御船藏建つ

一正保四丁亥年唐津城主寺澤兵庫頭堅高相續之嗣子無之家筋斷絶ス。仍テ兵庫頭所持船之內五艘被召上長崎ニ被差廻之。其翌慶安元戊子年馬籠(マコメ)村ノ內船場千三百七拾坪ノ地ニ御船藏被建之。

御船藏圖

但唐津ヨリ乘來ル船頭ノ内兩人水主拾人當表ニ被召抱御船藏ノ道筋ニ船頭居宅二ヶ所並水主小屋拾軒被建之。

一孔雀丸　六十四挺立　幕赤地白紋其外黑筋ノ幕有之

一雲龍丸　四十二挺立

一龍王丸　五十挺立

一無名　八挺立

一鸞鳳丸　八挺立

右五艘寺澤兵庫頭所持船之内

一獅子王丸　四十六挺立　帆ニ片輪車ノ紋有リ。

右生駒壹岐守船。寛永十三年瀨戸ニ漂流有之ヲ當湊ニ挽セ置、今年右ノ御船藏ニ入。

東京造の船

一東京（トンキン）造リノ船　慶安元年東京忠左衞門ト云者造之

一麒麟丸　十六挺立　一番船　六挺立

右二艘延寶四年末次平藏改易之節召上ラル。

一小鷹丸　十六挺立　一五ツ入子箱船

一水中船　此船肥後浪人川村茂庵造之。

一ヤゲン船　此船先年當沖ニ流レ來ル由。

阿蘭陀碇

一鉄碇　四十五挺　内一挺　阿蘭陀造り
一木碇　五百挺
一カバス　七十筋
一ヤシホ綱　二筋
一五重ノ井樓（セイロウ）　一組
一棕櫚綱　三十九筋
一籐綱　二筋
一唐船造リノ御船道具。寛文年中當表ニテ出來ノ船朽（クチ）損セシ故延寶九年解（トキ）船ニ成リ此御藏ニ入。

附鹽硝藏之事

御船藏境内鹽硝藏

一明和二乙酉年古昔寛永ノ頃ヨリ稻佐藏所ニ有之鹽硝ヲ今年御船藏境内北側（キタカワ）ノ岸ヲ穿（ウガ）チ石藏ヲ造リ右ノ鹽硝ヲ移シ入ラル。
石藏　竪　横
奥行（フクユキ）
庇（ヒサシ）

阿蘭陀船玉藥

一年來阿蘭陀在船中玉藥ヲ卸（ナロ）サシメ稻佐藏所ニ差置カシムル處是又今年ヨリ此藏内ニ入置シム。

向後此所相守リ鹽硝出シ入等ノ事御船頭兩人ニ銀百目宛、水主拾人ニ銀二拾目宛被下置之。
御高札
是より内ゟ用なき者一切出入仕間鋪候。並火之元猥ニ致へからさる者也
亥六月

御役所附武具之事

御役所及び武具

一先年武具入土藏本興善町會所屋敷之内ニ有之。享保六年長崎會所向屋敷ニ有之土藏一軒之内ヲ半分ニ仕切タル方ニ武具ヲ入置ル。（土藏間數等事第三卷ニ見ヘタリ）
一御鉄砲　百挺
一御紋付胴亂　百流
一木綿火縄　百筋
一御長柄鑓　五十筋
一御弓　二拾張
一御靱　二拾
一御矢　二箱
一御旗棹　拾本
右御奉行所御玄關ニ有之
一法螺貝　三ツ。内一ツ立山土藏ニ入。（一ツハ聖壽院預リ　一ツハ山伏仲ヶ間預リ）

一着込　五拾四櫃ニ入
一取手カキ　二本
一矢ノ根　拾本
一鑄鍋　大小五ッ
一鉄砲目釘拔　一ッ
一具足　百拾領内三拾領黑川氏三拾領甲斐庄氏
一木綿火縄　百五拾筋
一折レ石火矢　一挺
一紺木綿細引　拾筋
一絹ノ旗　拾
一請筒　拾
一旗棹　拾七本
一鉄鍍鍛　二拾
一鞍　五口
一陣太鼓　一ッ
一塗弓弦　八拾
一弓　拾八張
一絹幕　二張
一鑄形　大小八ッ
一木綿縵幕　一張
五拾領牛込氏岡野氏
一古胴亂　八拾五流
一革ノ鉄砲覆　九拾九
一木綿日覆　二張
一絹指物小旗　三拾
一指物棹　二拾七本
一棒火矢　五拾挺
一革ノ楯　八枚
一植熊障泥（アヲリ）　五掛
一太鼓臺　一ッ

一鉄カキ付板階子（ハシコ）　一ッ
一幕串　二拾九本
一玉鑄形　一箱
以上
一布幕　拾張
一百目長筒　一挺
一鉄砲二拾挺鑓五筋　御唐船道具

藥師寺家御預ケ石火矢之事

藥師寺家預ケ石火矢

一延寶元年ヨリ同八年迄ノ間藥師寺久左衞門方ヘ石火矢數挺御預ケ置ル。但藥師寺家先祖ヨリ自覺流ノ石火矢鍛煉ノ由ニ付寛永年中島原一揆籠城ノ節長崎御奉行出陣有之、榊原氏ハ鍋島手ニ加リ馬場氏ハ細川手ニ加リ、其節久左衞門、彼地ニ於テ石火矢御用令相勤ラル。其以後右ノ由緒ヲ以テ長崎表ノ石火矢御預ケ手入樣（イレタノシ）等入念可差置旨被仰付之。依之久左衞門手前ニ新ニ土藏ヲ建、石ノ石火矢玉藥等ヲ入置リ、其節御褒美銀被下置之。

一挺　唐銅　長一尺三寸　玉目三百目　當地ニテ造
一挺　唐銅　長一尺一寸　同二百目　同
二挺　唐銅　長二尺五寸三分　同六拾五匁　泉州船石火矢

二挺　鉄　長四尺　同百目　火災ノ節燒ル
四挺　鉄　長六尺七寸三分　同三百四拾目　西泊燒沈船ヨリ揚ル
一挺　鉄　長七尺二寸八分　同七百五拾目　大黑町海中ヨリ揚ル
一挺　鉄　長五尺三寸八分　同五百目　御船藏
一挺　鉄　長五尺二寸　同四百五拾目　同
一挺　鉄　長三尺九寸九分　同二百六拾目　同
一挺　鉄　長四尺八寸一分　同百九拾目　同
二挺　唐銅　長三尺五寸　同百目　同
二挺　唐銅　薄皮短大鉄砲　同三百目　但箱ニ入

右火矢臺六挺　カルカ二本　内サラヘ二本　三百目玉　鑄形箱ニ入

稽古打のため大筒一挺、小筒一挺、藥師寺宇右衛門へ預け

一寶永六年去ル元祿元年市中ヨリ鉄砲御取上ケニ相成シ内藥師寺宇右衛門所持ノ大筒一挺小筒六挺爲稽古打被相渡之。

一正德元年同御取上ニ相成シ内宇右衛門兄又次郎所持ノ小筒七挺、是又被相渡之。

一享保七年九月廿五日日下部氏石火矢樣爲見分自身出駕アリ。田上村ヨリ西方ニ當リ合戰原ト云所夫ヨリ東北方二拾四丁向ノ地タイラト云所ニ目的ヲ立テ石火矢三放シ令打ラル。其外小筒數挺樣シ有之。

合戰原及びダイラにて石火矢演習

御闕所武具並市中ヨリ鐵砲御取上之事

闕所武具並ニ市中より鉄砲取上げ

一延寶四丙辰年末次平藏改易之節御闕所武具之分

一南蠻具足　一領　一南蠻兜　頬當立物アリ　一箱入
一具足櫃　具足兜小道具有　二荷並一　一塗箱　同上　一
一弓　拾張　一矢箪笥　一荷
一旗棹指物棹　四本　一長持　矢根胴亂馬具入合　三棹
一鞍　五口　一鉄砲　三拾一挺
一熊手鳶口ヨリ棒ツク棒指又琴柱　合四拾四本
以上　武具藏ニ入

市中郷方所持鉄砲取上になる

一元祿元戊辰年市中郷方所持ノ鉄砲御取上ニ成ル
一鉄砲　七拾七挺　郷方役人百姓所持
一同　拾七挺　役人十四人所持證文アリ

一同　四百五挺　市中ヨリ御取上ケ武具藏ニ入

外ニ

五挺　松平和泉守内　並河團七

五挺　松平大藏大輔内　吉川小右衞門

二挺　相良遠江守内　岡部五兵衞

三挺　京都銀座

右ノ分ハ所持主ニ返サル。町年寄中ヨリ書狀相添返書有之。

瀨崎御用米藏之事

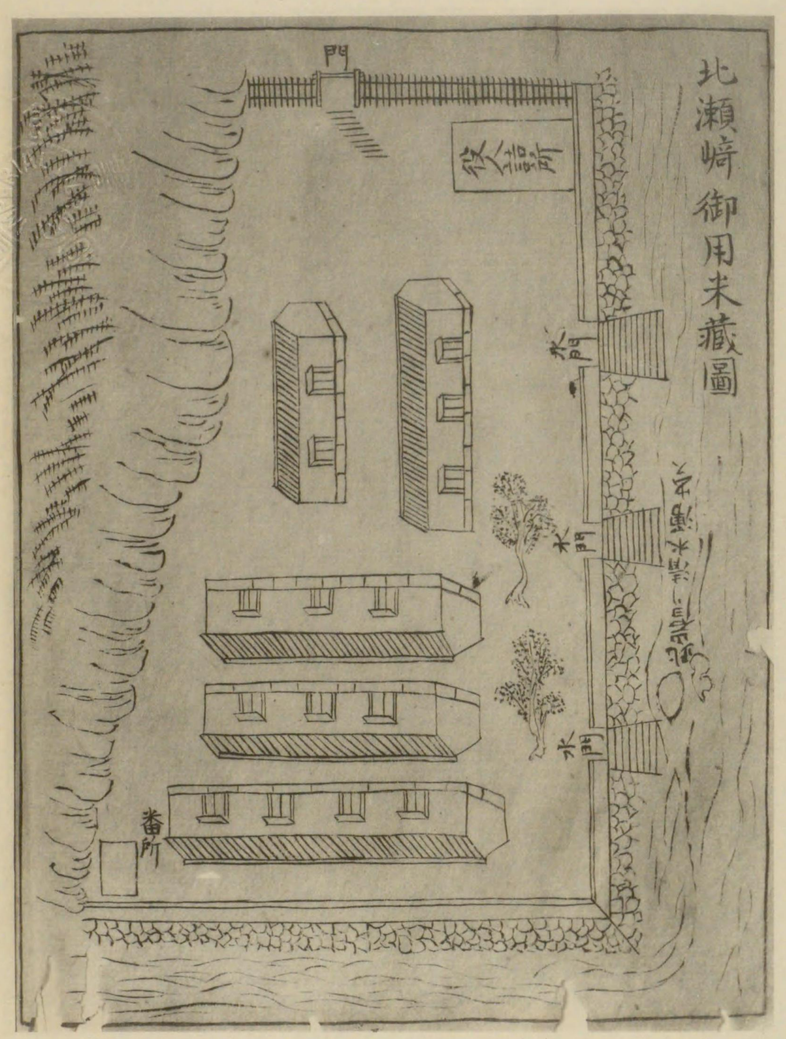
瀨崎御用米藏

一享保四己亥年七月瀨崎御用米藏新ニ修造有之。但御藏地ハ長崎村掛リノ内ニテ、山ノ内ハ山里村掛リノ地ナリ。

惣坪數千五百六拾一坪

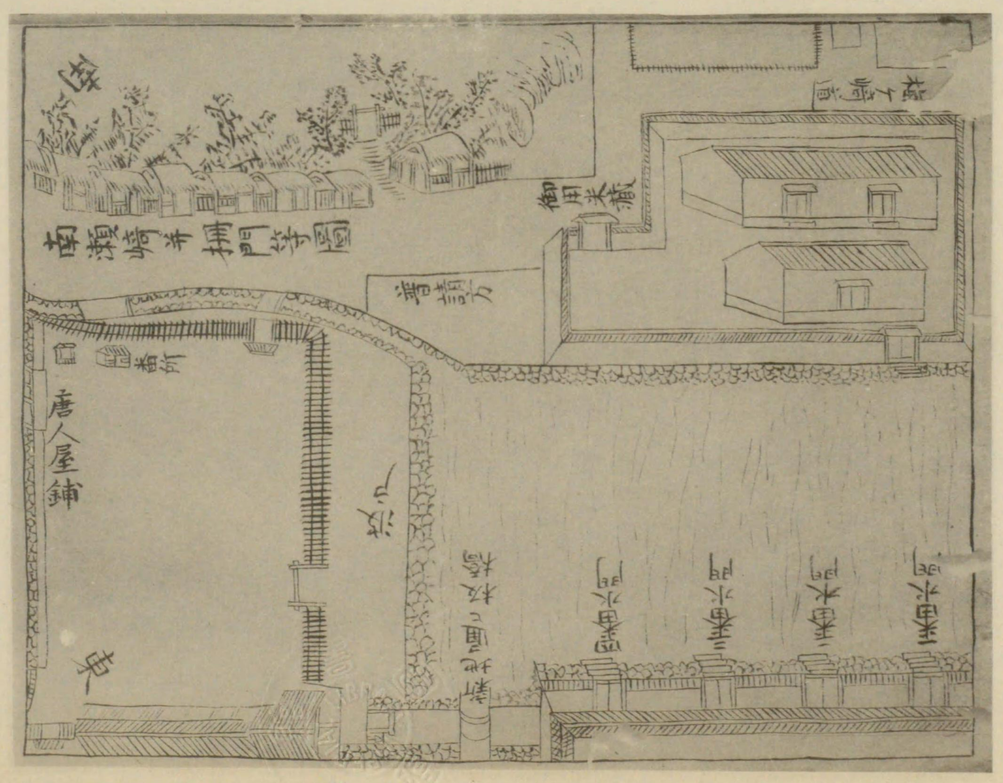
此内三百六拾二坪半ハ藪之内　五百五拾一坪ハ山之内也。

土藏　三軒　三間ニ拾五間　二軒　各三戸前有之



北瀨崎御用米藏圖

南瀨崎並柵門等圖



三間ニ二拾間　一軒　四戸前有之

十善寺米藏

一同五庚子年八月先年ヨリ十善寺村ノ内ニ天草御代官御米藏所有之ヲ向後長崎御地方ニ被仰付之。

惣坪數二百七拾五坪半

土藏　二軒

四間ニ八間　一軒　一戸前有之

三間ニ拾四間　一軒　二戸前有之

瀨崎米藏を北瀨崎米藏、十善寺米藏を南瀨崎米藏と稱す

一同九年是迄ノ瀨崎御藏所ヲ北瀨崎ト唱ヘ、十善寺村ノ御藏所ヲ南瀨崎ト可唱旨被仰出之。

船番屋敷土藏二軒を北瀨崎地内に引移す

一同十一年九月先年ヨリ船番屋鋪ノ地内ニ有之土藏二軒ヲ北瀨崎地内ニ引移サル。

三間ニ拾五間　一軒　三戸前有之

三間ニ拾間　一軒　二戸前有之

是ヨリ北瀨崎御藏數五軒ト成ル。

以上

北南瀨崎米藏廻着米

一北南兩瀨崎御藏所廻着米之事

豐後御米　壹萬石

天草御米　六千石ヨリ八千石迄

肥前御米　八百石余

右之通凡ソ一ヶ年廻着之石高。但年々少シ不同有之。

新地御米藏所之事

新地米藏

一明和元甲申年御料豐前國宇佐郡、石見國內三郡、右兩國ノ御城米當表ニ可被差廻旨被仰付之。翌二乙酉年夏中追々廻着有之。但新地土藏地形ノ內横拾二間長三拾一間ノ地ヲ仕切リ、御米藏所ニ被仰付之。

惣坪數三百七拾二坪

土藏三軒建

三間ニ拾間　二戸前有之

三間ニ拾五間　三戸前有之

三間ニ二拾七間　五戸前有之

役人詰所

表門　水門

石見豐前兩國廻着米高

一兩國廻着米高之事

石見御米　四千石

豐前御米　三千八百石　但豐後ヨリ三千五百石隔年ニ廻着アリ。尤是迄豐後御米壹萬石宛每年廻着ノ外此高隔年廻着也。

本紙屋町及び本興善町兩町火災の際新地米藏所詰を命ぜらる

一是迄火災ノ節本紙屋町本興善町兩町北瀨崎藏所詰被仰付處、明和二年十一月向後新地御米藏詰町ニ仰付ラル。

大波戸之事

大波戸

一文祿ノ頃ヨリ此所ヲ船着ノ波戸場ニ定メ石垣ヲ築キ地形ヲ均シ番所ヲ建寛永ノ初年ニ至リ船手ノ町々ヨリ下役ヲ出シ異國船着津ノ度々御奉行所ニ注進セシム。

大波戸諏訪社御旅所

一寛永十一年九月諏訪社御神事始リ此年ヨリ大波戸ノ地ヲ御旅所ニ相定ラル仍テ八月朔日假(カリ)御殿ノ地清秡ノ式アリ。

警固の番船、通船

一同十三年ヨリ唐船長崎湊一方ニ被令着船、同十八年阿蘭陀船平戸ヨリ長崎ニ被移、向後異國船一切他處ニ往來スル事御停止被仰付、當湊諸用繁多ニ成、警固ノ番船通船等ヲ出サセ、船頭水主賃銀諸入目等船手町々ヨリ差出サシム。

延寶五年地形築出

一延寶五年波戸場江戸町口ノ方（長五間四合五勺　横二間六合）坪數十四坪一合四勺（長十一間　横八合）坪數八坪八合（長七間　横七間五勺）坪數三坪一合五勺右三所合二十六坪餘、地形ヲ築キ出サシム。

元祿八年築出

一元祿八年（長七間　横七間）坪數四十九坪築キ出サシム。

元祿九年築出

一同九年（長八間　横八間）坪數六十四坪並入江ノ所（長三間二尺　横五間三尺）坪數十八坪余築出サシム。

波戸場間數之事

波戸場間數

東西　詰所前ヨリ江戸町口ノ門際迄　二拾五間。

南北　西御役所石垣下ヨリ海岸石段ノ上迄　東側二拾七間、西側二拾四間

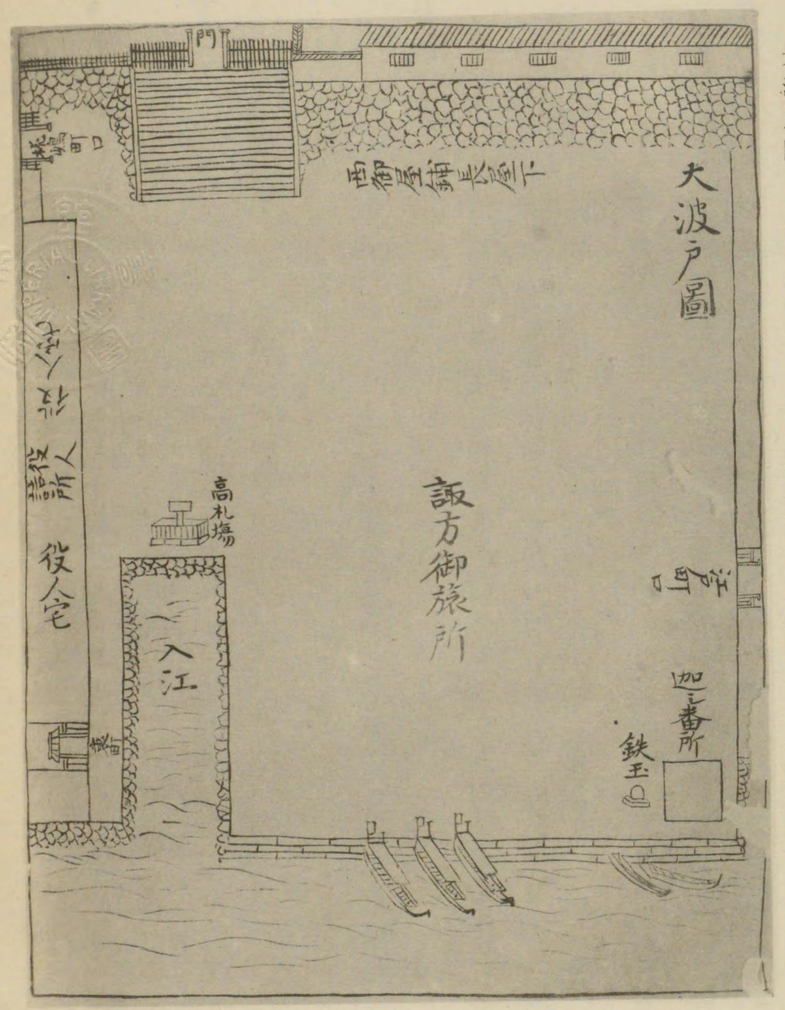
船着ノ石段上通リ　二拾間。

入江

入江　横五間三尺　長拾四間

此所風波之節御用船等引入可繫置用意也。

大波戸圖



迦番所

燈籠臺

役人詰所並定役居宅

高札

大波戸の鉄砲の玉

傳說

迦番所　一棟　長三間　横二間

寛文五年唐通事依願唐船夜中入津ノ時湊内方角目當ノ爲大波戸ニ燈籠堂ヲ建每夜燈火ヲ點シ置タキ旨御免有之。其後此所湊内ニ唐船阿蘭陀船在津中警固ノ繫番船役人ヲ被出處若風波甚シテ乘船成難キ時ハ繫番船ヲ迦シ此番所ヨリ海上ヲ見渡シテ相守ル故、其後ハ迦シ番所ト唱ル也。

役人詰所並定役居宅　一棟　横三間二尺六寸　長拾九間

此内中央二間ノ所役人詰所ニテ、左右八間半宛ノ所、定役二人居宅也。

御高札

湊きは斷なくして築出す事をゆるさず。並輕物塵芥一切是を捨へからす。若猥之輩於有之は可爲曲事者也。

十月

鉄之石火矢玉　一　大波戸坂際ニ有之

廻リ五尺六寸程

右鉄玉ノ事諸ノ舊記ニ其說ヲ出サス。賤夫等ノ傳話ニ蠻人我國ノ威ヲ顯サ

ント彼國ヨリ持來レリト云。或ハ日本ヨリ蠻船ヲ可擊沈用意也ト云。又一說ニ島原一揆籠城ノ節於彼地土中ニ穴ヲ堀リ拔キ塩硝數百斤ヲ以テ此玉ヲ打出スヘキ支度ニ鑄送セリト云。其說何レモ虛蕩ニシテ信用成リ難シ。暫ク其槩ヲ擧ル而耳。

新地土藏之事

新地埋築及び土藏建造

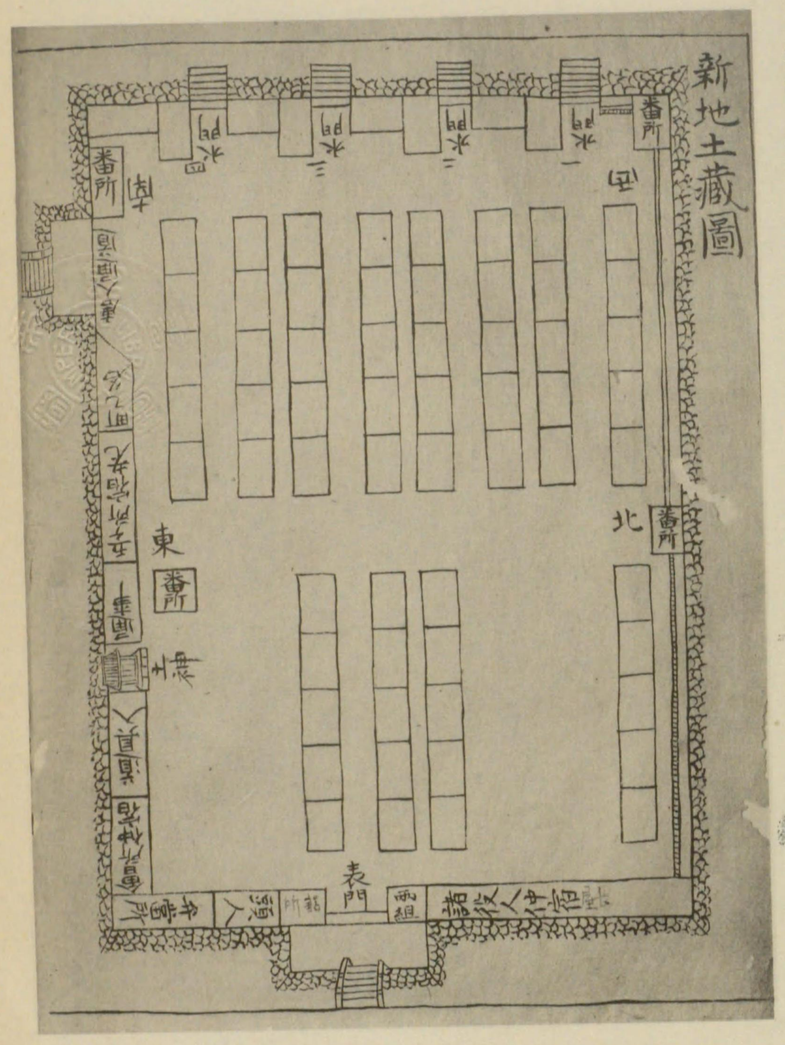
一元祿十一戊寅年四月廿二日夜市中出火有之。二拾二町燒失ス。其項迄ハ唐船積渡荷物荷揚ケノ節海邊船付ノ町土藏ヲ借リ入置。此時在津船二拾艘ノ荷物入置シ町土藏數三拾三之內拾八燒失シ、或ハ藏移シ荷物紛失ス。依是翌年土藏所持ノ町人三拾九人、海中ニ地形ヲ築キ、土藏ヲ建テ、藏借シ料ノ銀ヲ受用致シタキ旨相願之。則江府御窺ノ上御免有之。元祿十二年ヨリ同十五年迄ニ地形築立土藏成就ス。雜費銀公儀ヨリ二百貫目御取替、十ケ年賦ニ上納シ、藏主中ヨリ銀二百四拾貫目差出シ、藏數ニ應シ、藏借料ノ銀ヲ受用セリ。

築地の地形間數

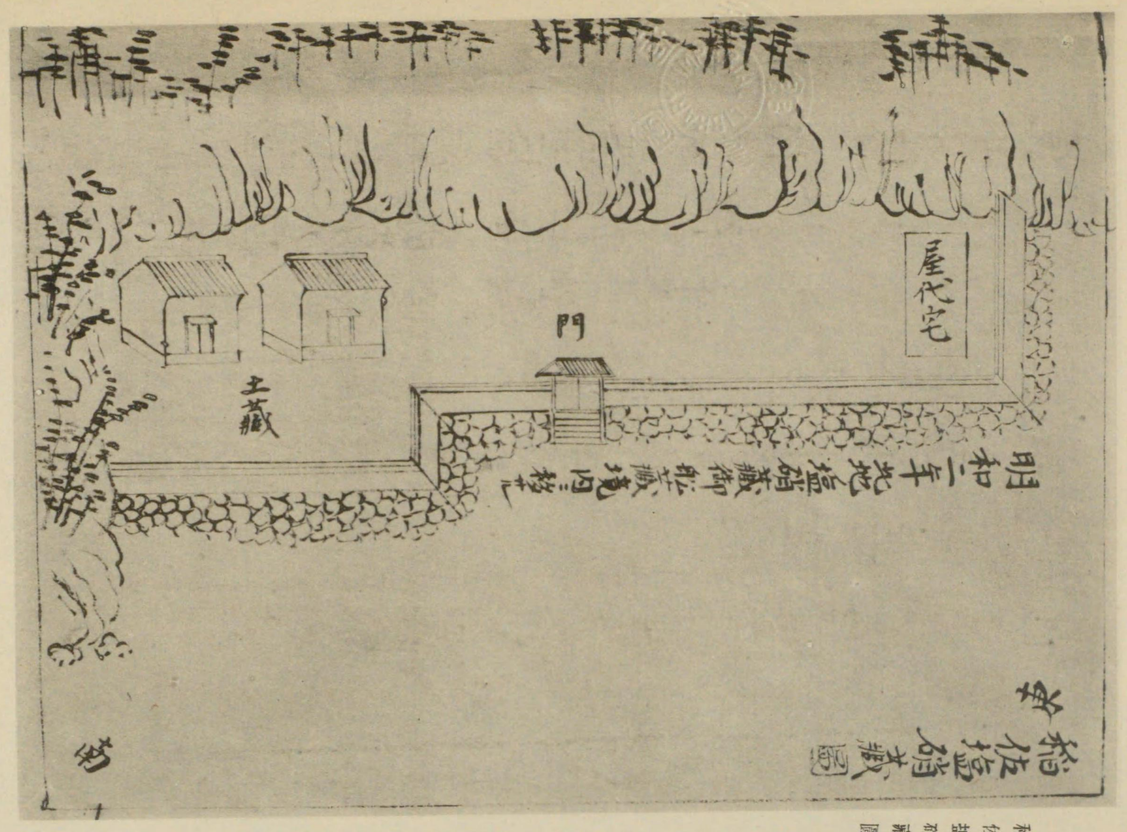
惣地形　東西七拾間　南北五拾間

地子金

右築地御地子金七拾五兩宛　年々上納



新地土藏圖



稲佐遺碑殿圖

土藏數　土藏數六拾　但拾二棟也　一棟ニ藏五ツ宛

土藏一棟の間數　右一棟ノ入リ　三間ニ長二拾五間也

表門　表門　左右ニ長屋有之。諸役人仲ケ宿數ケ所ト成ル。

小門　水門四ヶ所　一番ヨリ四番迄

土神祠　土神祠　一宇

番所　番所　東西南北

南門　南門　唐人屋敷通路也。門外ニ橋有之。

高札　御高札

此御藏地之内ニ無用之者一切不可入者也

亥十月

豐前、石見兩國廻米と米藏

明和二年ヨリ豐前石見兩所ノ廻米有之右新地ノ内ヲ仕切リ御米藏所ト成ル。

稻佐塩硝藏之事

稻佐塩硝藏

一寛永年中ヨリ稻佐鄉疋田長右衞門茶屋地内ニ塩硝ヲ被預置以後元祿三年土

中ニ穴藏ヲ造リ入置シムル處濕氣有之ニ付其後藏ヲ建入置シム。

一明和二年地主高本清藏ナリシニ御船藏空地ノ所ニ石藏ヲ造リ右ノ塩硝ヲ移シ入ラレ此藏所元ノ地主ニ差返サル。

紅毛船の玉藥を藏む

一阿蘭陀在船中玉藥ヲ卸サセ此藏ニ入置シムル處右同年御船藏右藏所ニ移入シメラル。

梅ヶ崎築地之事

梅ヶ崎築地

荒木傳兵衛十善寺村の海邊に埋築

一昔年ハ長崎領大村領磯續ノ干潟ニテ境目不相分之處、延寶八庚申年牛込氏在勤之節、荒木傳兵衛ト云者依願長崎領十善寺村ノ海邊ニ地形ヲ築キ、茶屋屋敷並土藏ヲ建タキ旨願之通被差免、地内ニ土藏一棟二拾八間入リ三間五戸前ヲ明ケ屋代居所二ケ所建之。但シ年來長崎領ノ境ニ榜示木ヲモ可被建置之處幸此築地ニテ大村領トノ境分明ニ相成レリ。則此所ヲ梅ヶ崎ト名付ラル

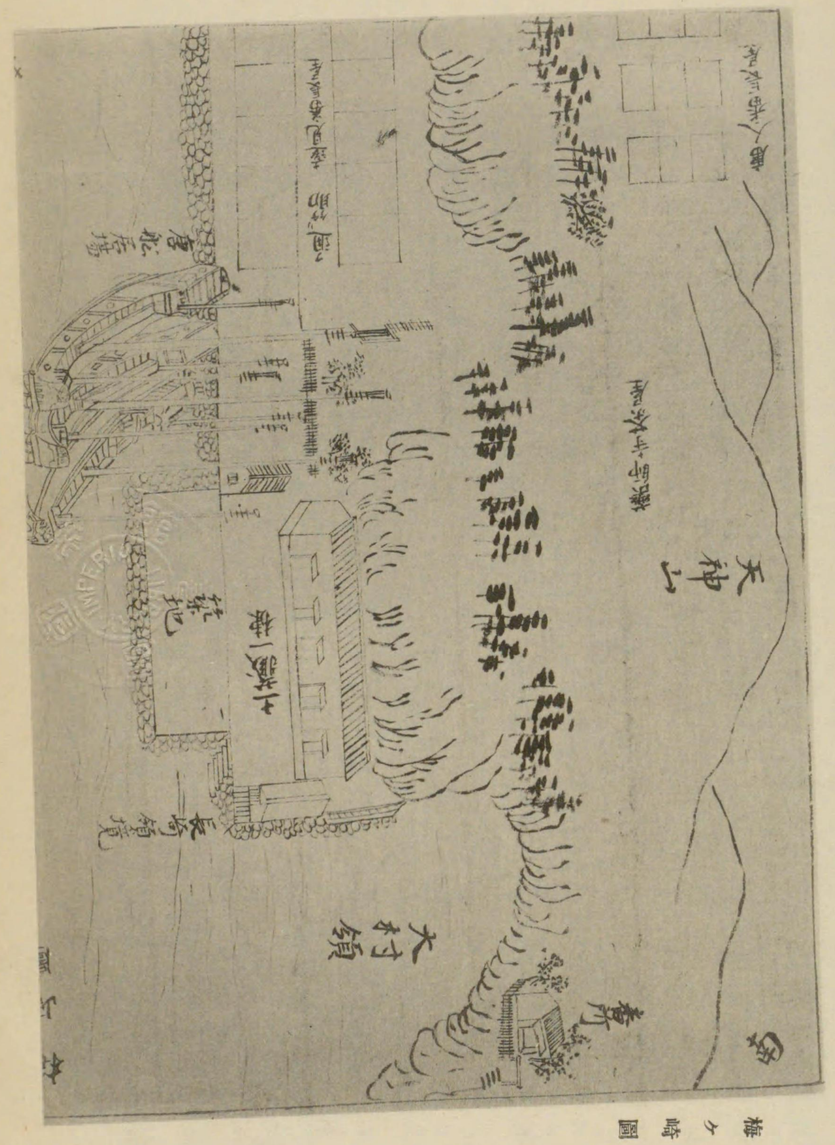
梅ヶ崎と名付く

茶屋地の上に天滿宮勸請

一茶屋地ノ上ニ天滿宮ヲ勸請セリ。

梅ヶ崎土藏

一前條ニ記スル通リ、先年ハ唐船積來諸荷物江戸町、五島町、大黑町海邊ノ町土藏並此梅ヶ崎土藏ニ入置之就中梅ヶ崎ハ市中ヲ離レ火災ノ難無之由ニテ專ラ



梅ヶ崎圖

相用來ルノ處、元祿十一年長崎大火ニテ町土藏令類燒。依之土藏所持主共海中ニ藏地ヲ築キタキ旨相願。則江府御窺之上築地御免ニテ新地土藏成就セリ。從是一切唐船荷物新地土藏ニ令入置之。其以後ハ梅ケ崎土藏ハ諸商人借用テ穀物俵物諸雜色ヲ入置之。

梅ケ崎海際に空唐船を居置事を許可せらる

一此地形ノ前海際ニ空唐船ヲ居置事ヲ差免サル。

梅ケ崎に大德寺開創計企

一元祿十六年此地ニ大德寺ヲ開創セント梅ケ崎茶屋地並天神山ノ讓リヲ請ル。但藏地ハ元ノ通リ荒木氏持分也。其後此藏地享保十七年春氏某讓ヲ請又元文二年服部氏某讓ヲ請ル。

寶永五年大德寺今の場所に移る。

一寶永五年此茶屋地狹隘ニシテ寺地ニ用ル事成カタキ由ニテ十善寺村郷地ニ藥師寺氏某ノ茶屋有シヲ求テ則今ノ大德寺ヲ創建セリ。其替地トシテ梅ケ崎ノ茶屋地天神山共ニ又中川村ノ内ニ三日市ト云所百間四方ノ地ヲ相添テ藥師寺氏方ニ相渡セリ。

三日市

梅ケ崎海邊に地形を築出し空唐船居場修造

一寶曆十二年梅ケ崎海邊ニ地形ヲ築出シ唐空船居場ヲ修造セシム。但古來ヨリ此處ニ唐船居置シムル處年々泥深ク成リ船ノ進退相滯ル故今年風障ノ地ヲ築キ海際ヲ鑿廣メシム。

風障築出

茶屋地前西角より南瀨崎藏地石垣際迄築出

但土藏前ニ風障ノタメ横拾五間縱拾七間ノ地ヲ築立ル。此坪數二百五拾五坪アリ。地子銀一坪ニ付九分掛リ也。又茶屋地ノ前西角ヨリ南瀨崎藏地ノ石垣際マテ凡ソ七拾五間ノ塲ニ地ヲ築出ス。横ノ間數不同ナリ。平坪六間程アリ。此坪數四百八坪アリ。地子銀一坪ニ付七分掛リ也。

長崎實錄大成

第三卷

田邊八右衛門茂啓編輯

御料地高並御高札役屋敷等之部

御料地高之事

御料地

一長崎御料地、古ハ長崎村浦上村二ケ村也。其後浦上村中ノ川筋ヨリ東方ヲ山里村ト稱シ、西方ヲ淵村ト稱シ、是ヨリ三ケ村ト成ル。

長崎村小名十三

長崎村十三郷

船津郷　十善寺郷　小島郷　高野平郷

中川郷、俗にナカゴと云ふ　馬塲郷　女夫川郷　片淵郷　伊良林郷　本河内郷

岩原郷　木塲郷　西山郷

山里村九郷

山里村小名九

里郷　濱口郷　平野郷　馬込郷　岡村郷　中野郷
荷尾郷　本原郷　家野郷

淵村十三郷　淵村小名十三

寺野郷　竹ノ久保郷　稲佐郷　船津郷　平戸小屋郷　水之浦郷
瀨之脇郷　飽之浦郷　岩瀨道郷　立上郷　西泊郷　此内五石五斗余西泊御番所ニ引ル
木鉢郷　小瀨戸郷

田畠總高　一田畠惣高三千四百三拾五石三升　三ケ村

内

町屋敷　八百三拾四石三斗六升六合　町屋敷ト成ル

田高　田高千九百四拾六石八斗三升七合九勺

此内

六百二拾二石八斗七合九勺　長崎村
千二拾一石八斗四升八合五勺　山里村
三百二石一斗八升一合五勺　淵村

畠高　畠高六百五拾三石八斗二升六合一勺

此内

四百四拾一石三斗二升六合一勺　長崎村
六拾六石一斗一升一合五勺　山里村
百四拾六石三斗八升八合五勺　淵村
右之高合三千四百三拾五石三升
此内村役人給分其外年々毛損不同有之

惣町割地之事

文祿の頃迄廿三町出來

一元龜二辛未年ヨリ地割始リ、六町出來シ、年々地形ヲ開キ、町屋敷ヲ建廣メ、文祿ノ頃迄二拾三町出來ス。

但天正十六年長崎御料所ニ被仰付、地子御免除之地ト成ル。是ヲ内町ト稱ス。

内町地子免除

一逐年長崎繁榮シ居住ヲ願フ者多ク成シ故、慶長二年ヨリ元和ノ頃迄ニ田畠高八百三拾四石餘ノ地ニ町數四拾町出來シ、定免ノ地子銀ヲ上納ス。延寶ノ初年迄ハ三拾八貫八百五拾目餘ナリシニ、延寶五年四拾七貫目餘ト成リ、同六年五拾貫目ト成ル。是ヲ外町ト稱ス。其後諸處築出ノ地形出來シテ地子銀增加ス。

外町地子銀

寶文十二年七十七町と成る但出島町丸山町寄合町を除く

一寛文十二年家ケ所多キ町々ヨリ願出ルニ付、一町ヲ二町或ハ三町ニ分チ、是ヨリ内外町數七拾七町ト成ル。

内町二拾六町　附ケ所數　地子免除之地

内町二十六町地子免除

江戸町 廿八ケ所　本下町 三十五ケ所　今下町 三十二ケ所
東築町 四十三ケ所　西築町 四十ケ所　樺島町 五十ケ所
本五島町 三十九ケ所　浦五島町 三十ケ所　船津町 三十六ケ所半
小川町 五十一ケ所　金屋町 三十三ケ所半

十一町船手　右拾一町　船手

島原町 三十三ケ所半　大村町 三十八ケ所半　平戸町 三十四ケ所
外浦町 四十一ケ所　本博多町 四十ケ所　堀町 三十三ケ所
引地町 四十ケ所　新町 三十二ケ所　豐後町 四十一ケ所半
櫻町 四十六ケ所　本興善町 三十九ケ所半　新興善町 三十ケ所
後興善町 三十三ケ所　今町 四十二ケ所半　内中町 三十三ケ所

十五町陸手　右拾五町　陸手

外町五十一町地子上納

外町五拾一町　附ケ所數　定免之地子上納

十九町船手

西濱町 三十九ケ所　東濱町 五十一ケ所　今鍛冶屋町 三十五ケ所
本石灰町 七十ケ所　船大工町 四十七ケ所　本籠町 四十八ケ所
萬屋町 六十九ケ所　榎津町 七十四ケ所　本古川町 七十三ケ所
西古川町 六十三ケ所　東古川町 六十三ケ所　材木町 二十四ケ所
本紺屋町 四十七ケ所　袋町 四十六ケ所　酒屋町 三十三ケ所
今魚町 六十三ケ所　出來鍛冶屋町 三十四ケ所二五
惠美酒町 八十五ケ所八三四六　大黑町 九十ケ所〇九二三

右拾九町　船手

油屋町 五十八ケ所　今石灰町 四十七ケ所　新石灰町 四十七ケ所
今籠町 四十五ケ所　銀屋町 五十一ケ所半　磨屋町 四十六ケ所
新橋町 二十八ケ所　麹屋町 四十九ケ所　諏方町 三十八ケ所一二五
八幡町 六十二ケ所　本紙屋町 四十三ケ所　伊勢町 六十一ケ所
新大工町 六十九ケ所　出來大工町 七十五ケ所　大井手町 三十七ケ所
古町 五十ケ所　桶屋町 五十八ケ所　今博多町 五十三ケ所半
今紺屋町 五十ケ所　中紺屋町 四十一ケ所　本大工町 六十一ケ所

勝山町四十七ケ所　北馬町五十二ケ所　南馬町五十ケ所〇七五
爐粕町五十七ケ所　八百屋町六十一ケ所　東中町七十四ケ所半
西中町七十二ケ所　東上町六十九ケ所　西上町七十三ケ所半
上筑後町六十七ケ所　下筑後町六十ケ所〇八七五
右三拾二町　陸手

三十二町陸手

外ニ

出島町

出島町二十七ケ所

右者寛永十三年ヨリ同十五年迄南蠻人被差置之處、其年蠻人不殘被追返
出島明屋敷ト成ル。同十八年阿蘭陀人平戸ヨリ長崎ニ被引移。是ヨリ阿蘭
陀人住館ト成ル。坪數三千九百六拾九坪一合。地子銀一貫六百七拾三匁一
分三厘年々上納ス。

丸山町

丸山町四拾九ケ所

右者小島村ノ内丸山ト云野地ニ遊女屋三軒有之處、或時三軒共ニ同時ニ
燒失ス仍テ寛永十九年同村ノ地ヲ開キ市中ニ有之遊女屋ヲ此所ニ引移
シ丸山町ト唱ヘシム。坪數四千五百三十八坪。地子銀一貫六拾一匁七分二
厘年々上納ス。

寄合町

寄合町五十二ケ所

右者同年同村ノ内野地ヲ開キ市中諸處ニ有之遊女屋殘ラス此所ニ引移
シ寄合町ト唱ヘシム。坪數五千百四坪八合一勺一才。地子銀一貫四百二拾
九匁二分九厘年々上納ス。

長崎惣町數合八拾町

元禄十二
内町、外町の差別廢止

一元禄十二己卯年七月御奉書到來ニテ向後内町外町之差別無之、諸公役諸配分
銀等一切可爲平均旨被仰出之。是ヨリ内町外町ノ名目相止之。

高札並囑託銀

御高札並囑託銀之事

一慶長ノ頃ヨリ大波戸地内ニ御高札場ヲ建置ル。寛永三年切支丹訴人爲囑託銀
三百枚被掛之。
一延寶八年八月豐後町掛リ水溜リノ所ニ土石ヲ埋メ、左右石垣ヲ築、御高札場被
引移之。
柵内　入二間二尺六寸　長六間四尺二寸

但晝番一人、夜番三人宛相勤シム。

一天和元年、囑託銀二百枚相增、都合五百枚ト成ル。

晝番　夜番

天和元年囑託銀五百枚と成る

但豐後町、櫻町、勝山町三町年番ニ相預リ置ル。每月朔日ヨリ五日迄柵內ニ令掛ラル。尤火災ノ節ハ豐後町、出來鍛冶屋町、兩町火消等引連レ相詰ル。

一元祿元年囑託銀琢キ改仰付ラル

元祿元年囑託銀みがき改

一同十二年三月囑託銀是迄慶長銀此節元字銀ニ御改仰付ラル。

慶長銀を元字銀に改む

一享保三年右ノ銀琢キ改仰付ラル。

享保三年銀みがき

一同四年二月是迄元字銀此節正德年中吹替ノ新銀ニ御改仰付ラル。

正德吹替新銀に改む

一明和元年三月是迄新銀此節文印銀ニ御改メ仰付ラル。

文字銀に改む

一同二年八月御高札場立山御役所下八百屋町ニ被移之。

高札場立山役所下八百屋町に移さる

但火災ノ節豐後町、出來鍛冶屋町兩町此所ニ相詰ル事前例ノ通タリ。

一同年數年來建置レシ漢文ノ制札唐人屋敷高札場ニ有之二重ニ相成ルニ付此制札引除會所ニ入置ル。

漢文制札引除長崎會所に入置

禁制

一伴天連日本ニ乘渡事

肥前國　長崎

一日本之武具異國ニ持渡事

一日本人異國ニ渡海之事

附日本住宅之異國人同前之事

右之條々於違犯之族者速可被處嚴料者也。仍下知如件

奉　行

貞享四年十二月

諭唐船諸人

一耶蘇邪徒（蠻俗曰天主教）以罪惡深重故其駕舶所來者先年悉皆斬戮且其徒自阿媽港發船渡海之事既停止之自今以後唐船若載彼徒來則速斬其身而同船者亦當伏誅但縱雖同船者告而不匿則赦之可褒賞事

一耶蘇邪徒之書札並贈寄之物潛藏齎來於日本則必須誅之若有違犯而來者速可告訴焉猶有匿而不言者其罪同前條事

一以重賄密載耶蘇之徒干船底而來則即速可告之然則宥其咎且其賞賜可倍於彼重賄事

右所定三章如此唐船諸商客皆宜承知必勿違失

奉　行

貞享四年十二月

唐船諸人諭示制札引除く

明和二年此御制札引除ル

條々

一公儀之船者不及申、諸廻船共、遭難風時者助船を出し船不破損之樣成程可入情事。

一船破損之時其所近き浦之者入情荷物船具等取揚へし。其場所之荷物之內浮キ荷物者貳拾分一、沈ミ荷物ハ拾分一、川船ハ浮荷物三拾分一、沈ミ荷物ハ貳拾分一、取揚る者ニ可被遣事。

一沖にて荷物とぬる時者着船之湊ニおゐて其所之代官下代庄屋立合遂穿鑿船ニ相殘荷物船具等之分可出證文事。

附リ船頭浦々之者と申合荷物盗取とねたる由僞申ニ於てハ後日ニ聞るといふ共船頭ハ勿論申合輩悉ク可被行死罪事。

一湊ニ永々船を掛置輩あらは、其子細を所之者相尋日和次第早々出船致さすへし。其上にも令難澁と、何方之船と承屆、其浦之地頭代官に急度可申達事。

一御城米廻之刻船具水主不足惡船ニ不可積之。並日和能節於令破船と船主沖船頭可爲曲事。惣而理不盡之儀申掛之、又ハ私曲於有之者可申出之。縱雖爲同類、其科をゆるし、御褒美可被下、且又仇も不成樣可被仰付事。

一自然寄船並荷物流來ニおゐてハ揚置之へし。半年過迄荷主無之ニおゐてハ揚置之輩可取之。若右之日數過荷主雖尋來不可返之。雖然其所之地頭代官之差圖を可請事。

一博奕惣而賭之諸勝負彌堅可爲停止事。

右之條々可相守此旨若惡事仕ニおゐてハ可申出。急度御褒美可被下之。科人ハ罪之輕重ニ隨ひ可爲御沙汰者也。

延寶八年九月　日　奉行

定

一伴天連入滿惣而切支丹宗門之族不可隱置事。

一異國住宅之日本人於歸朝者不可隱置事。

一人賣買停止たり。但年季之者ハ拾ケ年ニ可限事。

一請人無之ニ、家を賣並宿借へからさる事。

附リ主人所背來者不可抱置事。

一武士之面々異國人手前ゟ直ニ買物停止之事。

一異國人之物を買取銀子遲々不可致事。

一振賣ニ來物兩隣ニ見せすして買へからさる事。

一似せ銀吹出すましき事。

一分銅並秤之類後藤寫之外取遣りすへからさる事。

一喧嘩口論停止之事。

一博奕一切停止之事。

右之條々違犯之輩於有之者可被處嚴科者也。

卯十月　日　　在勤之御奉行之名

條々

一伴天連並切支丹宗門之族、異國ゟ日本ニ渡海之沙汰近來無之間、自然相忍密ニ差渡儀可有之事。

一近年異國被差渡之南蠻人子共伴天連ニ可仕置企有之由。此已前渡海之伴天連共申候條、今程漸伴天連ニ可成之間、日本船を作り、日本人之姿をまねひ、日本之言葉を遣ひ、相渡候儀可有之事。

一異國船近年四季共ニ渡海自由たる之間浦々之儀者不及申在々所々ニ至る迄常々無油斷心を付見出し聞出し申出へし。縱彼宗門たりといふ共、於申出者其咎をゆるし、御褒美之上、乘渡船荷物共ニ可被下之。萬一隱し置、後日ニ伴天連又ハ同類之輩等捕之拷問之上者其隱れ不可有之間不申出之相隱輩之儀者不及申其一類又ハ其品ニより一在所之者迄急度曲事ニ可行事。

右之條々海上見渡所之番之者共ハ勿論獵船之輩其外之者ニ至る迄念を入見出し聞出し奉行所迄可申出者也。仍而下知如件。

卯十月　日　　在勤之御奉行之名

延寶八年吉利支丹訴人囑託銀高札及び毒藥似せ藥制禁高札文言書改

一正德元辛卯年去ル延寶八年被建置之キリシタン訴人囑託銀ノ御高札並毒藥似セ藥種御制禁之御高札共ニ文言御書キ改ノ二串外ニ今度新規ノ御高札二串共ニ被建置之。

定

きりしたん宗門ハ累年御制禁たり。自然不審成者有之者申出へし。御褒美として

伴天連の訴人　銀五百枚

いるまんの訴人　銀三百枚

立かへり者の訴人　同　斷
同宿並宗門の訴人　銀百枚

右之通下さるへし。たとひ同宿宗門之内たりといふ共申出る品ニより銀五百枚下さるへし。隱置他所ゟ顯るゝに於てハ其所之名主並五人組迄一類共ニ可被行罪科者也。

正德元年五月　日

定　奉行

一毒藥並似せ藥種賣買之事禁制す。若違犯之者あらは、其罪重かるへし。たとひ同類といふ共、申出るニおゐてハ、其罪をゆるされ、急度御褒美下さるへき事。

一似せ金銀賣買一切ニ停止す。若似セ金銀あらは金座銀座ニ遣ハし相改へし。はつしの金銀も是又金座銀座ニ遣ハし相改へき事。附リ惣而似せ物すへからさる事。

一寛永の新錢、金子壹兩ニ四貫文、壹歩ニハ壹貫文たるへし。御料私領共ニ年貢收納等ニも、御定の如くたるへき事。

一新錢之事、錢座之外、一切鑄出すへからさる事。

一新作之慥ならさる書物、高賣すへからさる事。

一諸職人言合せ作料手間賃等高直ニすへからす。諸商賣物、或ハ一所ニ買置し、め賣し、或ハ云合せて高直ニすへからさる事。

一何事ニよらす誓約をなし徒黨を結ふへからさる事。

右條々可相守之。若於相背者可被行罪科者也。

正德元年五月　日

定　奉行

一親子兄弟夫婦を初諸親類にしたしく下人等ニ至迄是を憐むへし。主人有輩ハ各其奉公ニ情を可出事。

一家業を專にし懈る事なく萬事其分限ニ不可過事。

一僞をなし、又ハ無理をいひ、惣而人の害ニ可成事をすへからさる事。

一博奕之類一切ニ禁制之事。

一喧嘩口論を愼しミ若其事有時みたりニ出合へからす。手負たる者隱し置へからさる事。

一鐵砲猥に打へからす。若違犯之者あらハ申出へし。隱置他所より顯るゝニお

おてハ其罪重かるへき事。

一盜賊惡黨之類あらハ申出へし。急度御褒美可被下事。

一死罪に行はるゝ者有時馳集るへからさる事。

一人賣買堅く停止す。但男女の下人、或ハ永年季、或ハ譜代ニ召置事ハ相對に任すへき事。

附リ譜代の下人又ハ其所ニ住來る輩他所ゟ罷越妻子をも持有付候者呼返すへからす。但罪科有者ハ制外之事。

右條々可相守之。若於相背者可被行罪科者也。

正德元年五月　日　奉行

定

一火を付る者を知らは早く申出へし。若隱置ニおゐてハ其罪重かるへし。たとひ同類たりといふ共申出るニ於てハ其罪をゆるされ急度御褒美可被下事

一火を付る者を見付ハ是を捕へ早く申出へし。見のがしニすへからさる事。

一怪しき者あらは穿鑿を遂て早く奉行所ゟ召連可來事。

一火事之節鑓、長刀、刀、脇指等ぬき身にすへからさる事。

正德二年高札一串建

一火事場其外何れ之所ニても金銀諸色拾ひ取らハ奉行ゟ所持參すへし。若隱置他所ゟ顯るゝに於てハ其罪重るへし。たとひ同類たりといふ共申出る輩ハ其罪をゆるされ御褒美下さるへき事。

右條々可相守之。若於相背者可被行罪科者也。

正德元年五月　日　奉行

一正德二壬辰年御高札一串被建。

前々ゟ浦々高札相建

公儀之船者不及申、諸廻船共猥成儀無之樣被仰付候處、遭難風候節茂所々之者共船之助ニハ不相成、却而破船候樣致かけ、荷物を刎させ、或ハ上乘船頭と申合、不法之儀共有之樣ニ相聞へ、不屆ニ候。御料ハ御代官私領ハ地頭ゟ常々遂吟味毛頭不埒不仕樣急度可被申付候、若此上不埒之儀於有之者後日ニ相聞へ候ハヽ、其者ハいふニ及はす所之者迄被行重科、其上其所之御代官地頭迄可爲越度事。

一御城米船近年破船多候ニ付、今度諸事相改別而大切ニ可仕旨申渡、船足之儀淡深ク不入樣ニ、大坂船ハ大坂奉行、其外國々之船ハ其所支配之御代官ゟ船

足定之所ニ極印を打、船頭水主之人數を不減少樣ニ急度申付令運漕筈ニ候。
依之湊ゟ寄候船之分者船頭水主人數並船足極印之通無相違哉送狀ニ引合
急度相改帳面ニ記置、上乘船頭印形致させ、右書物其所ニ留置、御料ハ御代官
私領ハ地頭ゟ差出之、御代官並地頭ゟ御勘定奉行迄可被差出候。且又極印ゟ
船足深ク入候船有之候ハヽ、積候俵數委細ニ改之、御城米之外、船頭私之運賃
を取、他之米穀或ハ商賣之荷物等積入候歟、又ハ水主人數定之內令減少候ハ
ヽ、私ニ積入候荷物ハ其所ニ取揚置、水主人數不足之分ハ其所ニ而慥成ル水
主を爲雇、爲致出船、其上ニ而右之譯早速御勘定奉行ゟ可訴之事。
一破船有之節浦々之者出會荷物船具等取揚候刻、盜取候歟、又者不屆之仕方於
有之者、船頭ゟ不隱置、有体ニ早速可訴之事。
右之條々急度可相守。若違犯之輩於有之者、僉議之上可被行罪科。不吟味之子
細茂候ハヽ、其所支配之御代官又者地頭迄可爲越度者也。
正德二年八月　日
右之趣被仰出候條急度可相守者也。

奉行

正德四年拔荷禁制
高札二串建

一正德四甲午年御高札二串被建。

條々

一浦々ゟおゐて船を借り候而異國船之拔荷を買取候者有之由相聞へ候。自今
以後者たとひ初ゟ其事之子細をしらすして借シ候共、其船之船頭水主ハ拔
荷買取候者と同罪ニ行はるへく候。然上ハ諸國浦々之船頭水主常々申合置
候而、若拔荷買候者ニ船を借シ合候ハヽ、搦捕候而長崎奉行所又ハ其所之御
代官所頭ゟ成共程近き所ゟ申出へし。若又船中ゟてハ捕へ難き事茂候ハヽ、
何方ゟ成共船を付候所ゟて其所之者ニ告知セ搦捕候而其所ニ預ケ置キ、是
又長崎奉行所又ハ其所之御代官所地頭ニ成共申出へし。其船頭水主ニハ急
度御褒美を下さるへき事。
一浦々之船頭水主たとひ拔荷買取候事を申合候共、或ハ船中ニ而成共或ハ船
を付候所ニ而成共拔荷買候者を搦捕候事前ニしるし候如くニ仕候ハヽ、初
ゟ申合候罪科を免され御褒美ハ船借り候時ニ申合候代物之一倍を下し置
るへき事。
附其船之事ハ船主船頭等相對ニ而借シ候共、其水主之働キにより候而拔

荷買取候者並申合候船頭等搦捕候ハヽ、其水主ニ被下候御褒美之事是又船借リ候時船主船頭等申合候代物之一倍を被下へき事

一諸國浦方ニおゐて拔荷買取候者有之由を告知らセ候者有之候ハヽ、其所之者共早速ニ出合候而搦捕へし。若令油斷取逃し候ニおゐてハ急度其罪科ニ可被行事。

右條々急度可相守者也。

正德四年二月　日　奉行

條々

一異國船ゟ拔荷を買取候金元を致人を雇候而拔荷仕候者有之由相聞へ候間、彼族を訴人仕ニおゐてハ吟味之上金元仕候者之金銀、米錢、家財等迄不殘可被下事。

一拔荷仕候を同類之内ゟ召捕或ハ訴人仕候者ニハ右之荷物御褒美として可被下之事。

一唐人と拔買を申合、又者右之會合之取次を致し或ハ拔荷物仕馴たる者並拔荷物ニ雇ハ㆑或ハ其事ニ携り候者之事訴人仕ニおゐてハ、急度御褒美を可被下、たとひ同類たりといふ共、其科をゆるし賃銀禮銀等申合候員數一倍可被下之事。

附唯今迄拔荷仕候者之宿致シ或ハ拔取候荷物預り隱シ置候者或ハ手合仕候者たりといふ共訴人仕候ハヽ、是又其科をゆるし御褒美被下候事。右同前たるへき事。

右之條々急度可相守之。若存なから隱置外より令露顯者、其科本人可爲同前者也。

正德四年八月　日　奉　行

享保十七年高札

一享保十七壬子年御高札一串被建。

一今年西國、四國、中國、五畿内邊迄茂田作虫付損亡ニ付御料所百姓共夫食米被貸渡候。然共虫付之國々夥敷損亡之儀故此上ニ茂來春麥作出來候迄之内難取續者茂可有之哉、虫付候村之内ニ茂米穀金銀貯へ有之者ハ身上相應ニ飢人共ゟ合力致シ或ハ貸渡、又者米穀金銀貯ハ無之候得共平生の如く相應ニ暮シ候者ハ夫食不足之者同樣ニ隨分食物勘畧致シ其餘計を飢人ゟ合力又者貸シ渡候而何卒餓死之者無之樣隨分可致助抱事。

一損亡之國之内ニ而茂所により虫付さる所にて其村食物不足無之候共此節者名主庄屋長百姓を初小百姓ニ至迄損亡之村々同樣ニ心得食物を減シ少ニ而茂餘計あらは近郷之飢人に施シ又ハ貸シ候而其上ニ茂餘計あらは不貯置賣出すへし。今年幸ニ虫付之わさハひを遁候とて近國近郷之難儀を見なから平生の如く暮し候儀者冥加之程をも可恐事ニ候。年の廻りふて豊年凶年ある事ハ、自然我村凶年之わさハひニ逢候時者他村之合力を請取續へし。此度他をおろそかゝしてハ我難儀之時他村之合力疎略なるへし。大凶年ニハ國々一同之持合ニなくてハ取續難成儀故此所を能く心得名主庄屋長百姓等世話致シ村中ニて少宛も出シ合候ハ、難儀之村合力又ハ貸シ候樣ニ茂可成候間名主庄屋長百姓隨分可出情事。

一朝夕の食物さへ右之通ニ候得者況酒餅麺類等ニ費をすへからす。惣而〻賣彌堅ク停止之事。

右之趣在々所々に相觸合力救なと仕候者有之と名主庄屋等隨分無油斷逐吟味其段爲後日御代官並支配所に可申出者也。

子十二月

寶曆三年高札

一寶曆三葵酉年御高札一串被建。

定

拔荷之儀前々より稠敷遂吟味候得共今以相やます、近比者沖にて荷物請取又ハ流寄之浦々ニ而荷物請取候事有之候。過分之賃錢取候事故申合候段甚不届ニ候。此後拔荷之儀相賴候者於有之ハ其荷物直ニ長崎御役所に持來り被賴候樣子申出るニおゐてハ申合候科をゆるし候上右荷物不殘其者に取らすへく候。

一拔荷致候頭取召捕訴出る者於有之者急度褒美取セ、たとひ前々拔荷之手合致候者たり共其科をゆるしあたを成さる樣ニ可申付候。

一唐人ゟ日本人に荷物相渡候手印遣之相賴候ハ、其段早々申出へし。吟味之上急度褒美とらすへく候。

右之趣急度可相守者也。

寶曆三年酉六月　在勤之御奉行之名

寶曆三年辻番所に訴狀箱差出さる

一同年御役所辻番所ニ訴狀箱被差出之。

向後隔月ニ訴狀箱差出候間、右之趣相心得書付入可申候。右書付ハ封印之儘

江戸表ニ差上候間、意趣遺恨を以僞成儀申出るニおゐてハ吟味之上急度申付候間、地下郷方末々迄此旨可相守候。

一長崎地下御代官御預り所之者共ハ格別、近國之者共心得違箱訴致間敷候。

訴狀箱ニ書付入候事

右者御仕置筋之儀ニ付御爲ニ可成品諸役人初私曲非分有之事可致直訴候。且又訴訟有之相願候者役人不遂詮議捨置候事有之候者其段御役所ニ相斷候上ニ而猶又吟味無之候ハヽ直訴可致候。

一唐船漂着申候浦々拔荷之筋ニ付表立難申儀有之候ハヽ直訴可致候。

一町方郷方其外ニ而茂御救ニ可罷成候間、何之品被仰付候樣ニとの願之事。

一公事合之事

一自分願之事

右是等之類ハ御役所訴可出候。一應不申出猥ニ箱ニ書付入候ハヽ、御吟味有之品ニ而茂御取上ヶ無之間右之趣相心得若滯候事有之ハ、御役所ニ相斷候上直訴可致候。尤訴狀入候者宿付ヶ姓名可書付候。封シ目ニ印形相調入可申候。

姓名無之訴狀ハ取上ヶ無之事。

右之趣可相心得者也

酉九月

長崎會所

割符商賣破却

市法商賣止となる

市法會所

長崎會所之事

一慶長九甲辰年絲割符商賣相始り、承應三甲午年迄五十余年相續之處、明暦元乙未年商人等難澁之事有之ニ付割符商賣被令破却市法商賣ト成ル。

一江戸、京、大坂、堺、長崎五ヶ所役人共會所、最初ハ本博多町ニ有之處延寶三乙卯年八百屋町ニ有之七ヶ所ノ屋敷地ニ被移之、市法會所ト稱ス。

但八百屋町七ヶ所ノ町人共ハ東上町、上筑後町ニ有之横山某屋敷ヲ替地ニ被相渡、横山某ニハ本博多町ニ有之最首ノ會所跡ヲ替地ニ被相渡之。

絲割符再興

市法會所を割符會所と改移

元祿十一年より長崎總勘定所となり長崎會所と稱す

一明暦元乙未年ヨリ貞享元甲子年迄三拾年絲割符斷絶之處、貞享二乙丑年異國商賣銀高員數相定ルニ付市法商賣相止ミ古格ニ準シ絲割符再興有之。是ヨリ割符會所ト稱ス

一元祿十一戊寅年ヨリ長崎總勘定所ト成リ、是ヨリ長崎會所ト稱ス。

坪數

惣坪數二百拾九坪四合二勺餘

北　拾三間一尺三寸　表門

東　拾四間三尺　立山御役所ノ下通リ

西　拾四間二尺　川筋石垣ノ上通リ

南　拾七間二尺　中宿屋鋪ノ境

土藏　二軒

一軒　三間ニ四間　内仕切ニ戸前

一軒　三間ニ七間　内仕切ニ戸前

明和二年南境中宿屋敷の内を增し、尙ほ御役所勝手道具入れ土藏を引移す

一明和二乙酉年會所南境中宿屋敷地ノ内ヲ增入レ東上町御役所勝手道具入置レシ土藏ヲ此處ニ引移サル。

但右ノ道具等ハ西御役所表藏ニ入ラル。

東西五間一尺　南北三間五尺

坪數拾九坪五合六勺三才

土藏　一軒　二間ニ三間　今年引移サル

同　一軒

向屋敷

もと聖堂の在りし處

南　拾二間三尺四寸　表門

東　拾五間二尺三寸　立山御役所ノ下通

西　拾七間一尺　川筋石垣ノ上通

北　六間　武具藏ノ塀外

右ノ地ハ昔年聖堂造立ノ所也。正德元年聖堂今ノ地ニ被引移此處明キ地ト成シテ同四年爲替會所ヲ建ラル。享保十年爲替方相止ミ其後拂方會所ト稱シ、長崎會所勘定所ト成ル。

爲替會所、拂方會所となり、更に長崎會所勘定所となる

土藏　一軒　内二ツ仕切

入三間ニ長拾間

但此拾間ヲ五間宛ニ仕切リ、一方ハ會所方ニ用之、一方ハ武具藏ニ相成ル。

此藏先年ヨリ有之。今年修覆ヲ加ラル。

附武具藏之事

武具藏

一先年武具藏ハ本興善町絲荷藏屋敷ノ内ニ有之處享保六年會所向屋鋪ノ土藏ヲ仕切其半分武具藏ト成ル。

土藏　一ケ所　三間ニ五間但一棟拾間ノ内半分仕切五間ト成ル

東　立山御役所長屋ノ下通リ　北　二間ハ石橋ノ方

南　六間ハ向屋敷ノ内　西　裏手ハ川筋石垣ノ上

時之鐘鑄造之事

時之鐘鑄造

一寛文五乙巳年時之鐘鑄造有之。島原町内ニ鐘撞所ヲ建ラル。七月十日成就シ同八月十二日掛置ル處、翌年撞破ニ付同年鑄直サシム。

島原町内に鐘撞所建つ

鐘　高三尺五寸　口　指渡二尺五寸五分

重サ九百斤　鑄物師賃銀壹貫四百目

一延寶元癸丑年十一月大光寺ノ傍今籠町ノ上ニ有之畠地ニ鐘撞所ヲ引移サル鐘撞所横二間長六間四尺。但中央一丈ノ所ニ鐘ヲ掛置、左右ニ鐘撞者兩人居所也。

大光寺の側に移る

明和三丙戌年

一明和三丙戌年鐘撞所ヲ豊後町掛リノ地ニ引移サル。

更に豊後町に移る

入二間　長七間　重平次

常次郎

但寛文五年始テ鑄造有之島原町内ニ掛置ル、處、九年後延寶元年大光寺ノ傍ニ移サル。九十四年ヲ經テ去年御高札場ヲ八百屋町ニ引移サレシ跡ノ地ニ被仰建之。當三月十四日ヨリ撞始ル。

明和三丙戌年三月十四日より豊後町にて撞始む

遠見番役屋敷之事

遠見番役屋敷

一寛永十五戊寅年野母日野山上ニ番所ヲ建、異國船見掛ケ次第可令注進旨。番人ハ寺澤氏預リ地ノ百姓四人宛令相勤。又同時ニ烽火山番所ヲ建狼煙ヲ擧テ不時ニ近國ニ急ヲ告シムヘキ旨。長崎領ノ百姓二人宛令相勤之處、萬治二己亥年百姓共是マテ二十二年相勤及困窮ノ旨相願フニ付被差免、此年新ニ遠見番役拾人被召抱水主拾人仰付ラル。第二卷ニ見ヘタリ

十善寺村海手に遠見番具屋建つ

長屋拾軒　拾六坪宛　但十善寺村海手ニ建

小瀨戸番所建つ

一元祿元戊辰年小瀨戸番所建。此時拾二人相增、内二人觸頭被仰付之、水主拾人相增。同前

長屋拾二軒　坪數同前　但同村山手ニ建

唐人番役屋敷

唐人番

唐人番役屋敷之事

一元祿二己巳年唐人屋鋪初テ被建。是マテ唐人共町宿ニテ諸人ニ謾リニ會合スル事不可然トテ向後舘內ニ在住被仰付。依之新ニ唐人番人二拾人被召抱之、唐人屋敷大門並ニ門ニ相勤、諸人出入ヲ相改シム。內二人觸頭被仰付之。（第十卷ニ見ヘタリ）

出島阿蘭陀屋敷にも勤む

一向後出島大門ニモ相勤出入ヲ相改シム。其外唐人阿蘭陀人一切諸處出行之節道中警固令相勤ラル。

唐人番長屋

長屋二拾軒　拾六坪宛

船番屋敷

但十善寺村遠見番長屋ノ上段ニ建之。

船番役屋敷之事

一先年ハ唐船阿蘭陀船當湊內ニ在留ノ間爲警固御奉行所ヨリ徒步二人同心二人被差出ノ處、寛文十二壬子年當表來住ノ浪人七人新ニ召抱ラル。其節高力攝津守浪人拾人依相願一同ニ被召抱拾七人船番役ト名付ケ、唐船阿蘭陀船、在津ノ內同心二人、船番一人、番船ヨリ警固被仰付。其外唐阿蘭陀諸役改場ニ相勤シム。

延寶二年東屋敷あと船番屋敷となる

一延寶二甲寅年是迄御奉行東屋鋪ヲ立山ノ地ニ移レシ跡ノ地ヲ船番役屋敷ニ被仰付。其內二人觸頭ニ仰付ラル。

長屋　拾七軒　坪數不同アリ

延寶三年船番屋敷內に御用米藏建つ

一同三乙卯年船番屋敷、此內ニ御用米藏建之。船番ノ內二人御藏米方加役被仰付之。

享保十一年御用米藏北瀨崎へ移る十人增、觸頭三人船番の內拾人御役所附となる

但享保十一丙午年此御用米藏ヲ北瀨崎ニ引移サル。

一寶永五戊子年諸勤役繁多ニ相成ルニ付、拾人相增、此時觸頭三人ト成ル。

一正德五乙未年新ニ御役所內ニ御番所被建船番ノ內拾人御役所附ニ被仰付。其跡平番拾人追々被仰付之。

船番の內四人御役所附に增す

一享保元丙申年船番ノ內四人御役所附ニ相增其跡平番四人外ニ平番八人相增是ヨリ御役所附拾四人、平番三拾五人ト成ル

但最初ノ人數拾七人ハ長屋ニ居住ス。其後段々相增人數ハ濱町築地又ハ市中借宅ニテ居住ス。

町使役屋敷之事

町使屋敷

一慶長八癸卯年初テ目付役五人被召抱。其後町使役ト名付ラル。元和五己未年四人相增、寛永十二乙亥年四人相增、延寶四丙辰年二人相增拾五人ト成ル。此内二人觸頭ニ仰付ラル。

町使長屋

長屋九軒　引地町ヨリ東ノ地

同　六軒　大井手町ヨリ北ノ地

島原の亂の際町使四名出陣

一寛永十四丁丑年島原一揆征伐ノ時長崎御奉行榊原氏附町使（藤郷九郎兵衛　鵜田五郎左衛門）馬場氏附町使（成田十左衛門　高横源兵衛）召連出陣アリ。

寛永十九年より紅毛人江戸參禮警固

一同十九壬午年ヨリ阿蘭陀人江府拜禮參上ノ節町使二人宛道中警固出勤被仰付之。

人數增加

一寶永五戊子年諸勤役繁多ニ相成ルニ付拾五人相增。此時觸頭三人ト成ル。

町使のうち十人御役所附となる

一正德五乙未年新ニ御役所内ニ御番所被建、町使ノ内拾人御役所附ニ被仰付其跡平番拾人追々被仰付之。

御役所附四人增

一享保元丙申年町使ノ内四人御役所附相增、其跡平番四人外ニ平番五人相增是ヨリ御役所附拾四人平番三拾五人ト成ル。

但最初ノ人數拾五人ハ長屋ニ居住ス。其後段々相增人數ハ濱町築地又ハ市中借宅ニテ居住ス。

散使役屋敷之事

散使屋敷

一慶長ノ頃町使、散使同樣ニ可相勤旨被仰付。或説ニ散使ハ町使ヨリ以前ニ初リシ由、其事分明ナラス。最前四人被仰付之。延寶四年二人相增、六人ト成ル。此内二人宛年番相立テ、役觸等ヲ成ス。別ニ觸頭ヲ立ル事無之。

長屋二軒　引地町ヨリ東ノ地。

長屋四軒　大井手町ヨリ北ノ地

囚獄屋敷之事

囚獄屋敷

一先年ハ南馬町坂際ニ有之處、慶長五庚子年櫻町屋敷地ニ囚獄屋鋪ヲ移サル。

西表門口　拾九間二尺　北櫻町ノ方　四拾六間四尺

南引地町ノ方　四拾六間　東勝山町ノ方　拾九間

牢屋

牢守り及び牢番の者居所寛文三年燒失

惣坪數八百八拾六坪九合七勺餘

牢屋四棟ニテ九ツ　一番ヨリ九番迄

但四間ニ七間　三棟　四間ニ五間　一棟

揚リ屋二間ニ四間　一棟　井戸三ヶ所

外ニ籠守リ籠番ノ者居所アリ。

一寛文三葵卯年當地大火ニテ牢屋類燒之節、松平丹後守普請方有之

長崎竪横並諸方道法之事

長崎竪横

新大工町門口ヨリ西御役所マテ　拾三丁半

同所ヨリ出島海手塀マテ　拾五丁四十七間半

同町横手ヨリ西濱町築地マテ　拾二丁十六間

爐粕町ヨリ江戸町大波戸マテ　拾二丁三十七間半

右者東西竪町之分

油屋町門口ヨリ樺島町マテ　八丁四十九間

晧臺寺下ヨリ福濟寺マテ　八丁十六間

深崇寺下ヨリ岩原前ノ石橋マテ　五丁五拾一間

右者南北兩町之分

陸路道法之分

陸路道法

一立山御役所ヨリ西御役所マテ　八丁八間

同所ヨリ西泊御番所マテ　七拾丁余

同所ヨリ戸町御番所マテ　四拾丁余

同所ヨリ小瀨戸マテ　二里半余

同所ヨリ野母マテ　七里三拾丁余

一西御役所ヨリ西泊御番所マテ　七拾二丁余

同所ヨリ戸町御番所マテ　三拾五丁余

同所ヨリ小瀨戸マテ　二里二拾丁余

同所ヨリ野母マテ　七里二拾丁余

一豐後町御高札場ヨリ新大工町門口マテ　五丁廿七間

一新大工町門口ヨリ二本杉マテ　二丁四十間

二本杉

二本杉ヨリ道古マテ　十四丁十間
道古ヨリ峠マテ　十六町廿間
二本杉ヨリ峠マテ　三拾丁三十間
一峠ヨリ日見宿マテ　拾九丁十間
日見宿ヨリ網場マテ　九丁
日見宿ヨリ矢上宿マテ　一里
一油屋町石橋ヨリ田上宿マテ　拾四丁十間
田上宿ヨリ茂木マテ　一里拾五丁
一西坂門口ヨリ山王社マテ　拾三丁四十五間
山王社ヨリ家野村土橋マテ　七丁十六間

海上道法之分

一大波戸ヨリ西泊御番所マテ　拾四丁
同所ヨリ戸町御番所マテ　拾七丁
同所ヨリ惠美酒社マテ　拾丁十二間
同所ヨリ神崎マテ　二拾九丁三十二間
同所ヨリ小瀨戸マテ　二里余
同所ヨリ野母船場マテ　七里
同所ヨリ深堀マテ　二里
同所ヨリ硫黄崎マテ　二里十八丁
一西泊ヨリ戸町マテ　五丁
同所ヨリ神崎マテ　拾二丁余
一戸町ヨリスヽレ石マテ　八丁余
同女神ヨリ神崎男神マテ　三丁四十三間
一神崎ヨリ高鉾マテ　拾丁余
同所ヨリ小瀨戸マテ　拾二丁余
同所ヨリ大中瀨戸マテ　一里六丁
同所ヨリ硫黄崎マテ　一里二十五丁

道古

海上道法

硫黄崎

スヽレ石

大中瀨戸

近國道法並當表藏屋敷附異船來津之節諸家陣所之事

筑前侯藏屋敷

一筑前福岡 松平筑前守　諫早通唐津通海陸三十六里 惣船路六十九里

下宿二十五町

浦五島町之內 藏屋敷

浦五島町　本五島町　樺島町　平戸町　江戸町
本下町　今下町　東築町　西築町　材木町
本紺屋町　袋町　酒屋町　桶屋町　古町
今博多町　大井手町　出來大工町　伊勢町　新大工町
南馬町　北馬町　外浦町　大村町　島原町

當番之年　西泊戸町御番所詰

陣所　飽ノ浦　鳥羽浦　立神之內

一松平肥前守 肥前佐嘉　大村通多羅通二十七里三十二町 惣船路五十七里

大黑町之內 藏屋敷

下宿二十五町

大黑町　西中町　東中町　東上町　上筑後町
下筑後町　小川町　內中町　櫻町　本與善町
後與善町　新與善町　豐後町　引地町　堀町
金屋町　今町　本博多町　船津町　爐粕町

陣所

鍋島氏藏屋敷

下宿二十五町

八百屋町　今紺屋町　中紺屋町　本大工町　今魚町

當番之年　西泊戸町御番所詰

每年　深堀在番所　但當番非番共ニ

陣所　大多越　神崎　神ノ島　硫黃島　香燒島　高島　加納

其外領分之內所々陣場有之

西濱町築地 藏屋敷

深堀在番所

陣所

島津氏藏屋敷

一松平薩摩守 薩摩鹿兒島　茂木通海陸六十六里 惣船路

琉球國爲押在國也。當表ニハ名代ヲ差越ル。

用場所

小島鄕之內 今村某掛屋敷

片淵鄕之內 林某掛屋敷

本紺屋町之內 藏屋敷

對馬侯藏屋敷

一宗對馬守 對馬府中　海路九十六里

朝鮮國爲押在國也。當表ニハ名代ヲ差越ル。

大黑町之內 藏屋敷

細川氏藏屋敷

一細川越中守 肥後熊本　茂木通海陸三十四里半 惣船路

陣所　水ノ浦鄕　悟眞寺　小瀨戸鄕　南海山　同上　水滴　木鉢

東中町東上町之內 藏屋敷

唐津侯藏屋敷

一水野和泉守 肥前唐津　時津通海陸二十五里 惣海路

陣所　下筑後町　福濟寺　馬込鄕　聖德寺　大村領之內　福田鄕